

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

動物園における社会関係の人類学的考察

氏名：廣野晴

学籍番号：201710388

指導教員：関根久雄

目次

第1章 序論.....	1
1-1. 研究目的	1
1-2. 章構成	2
1-3. 研究方法	2
第2章 人—動物関係に関する先行研究.....	3
2-1. マルチスピーシーズ人類学概要	3
2-2. 社会関係とは何か	4
2-3. 動物に対する見方	6
2-4. 小括.....	7
第3章 動物園概要	8
3-1. 動物園の歴史と人々の動物観の変遷	8
(1)古代・中世の動物コレクションと人々の自然観	8
(2)近世のメナジェリーと自然観	9
(3)近現代の動物園の特徴と存在意義.....	10
3-2. 動物園動物という存在.....	11
(1)動物を人為的な環境に取り込むということ	11
(2)動物福祉と環境エンリッチメント	13
第4章 現地調査概要.....	15
4-1. 調査地概要.....	15
4-2. 調査対象飼育員概要	15
4-3. 調査対象来園者概要	16
4-4. 調査対象動物概要	17

第5章 飼育員の語り	20
5-1. 飼育員から見た動物同士の関わり	20
5-2. 飼育員と担当動物の関わり	27
5-3. 来園者と動物との関わり	37
5-4. 飼育員と来園者との関わり	39
5-5. 飼育員の動物観・自然観・動物園観	42
(1) 動物観	43
(2) 擬人化について	44
(3) 動物園観	46
5-6. 小括	51
第6章 来園者の語りと観察結果	54
6-1. 来園者と動物の関わり	54
6-2. 来園者から見た飼育員との関わり	55
6-3. 来園者同士の関わり	56
6-4. 来園者の動物観・自然観・動物園観	56
6-5. 小括	58
第7章 結論・考察	59
7-1. 二者間の関係「双方向性」「経験の共有」「働きかけない」	59
(1) 動物－飼育員間	59
(2) 動物－来園者間	59
(3) 飼育員－来園者間	60
7-2. 媒介する関係「つなぎ、変容させる」	60
(1) 飼育員、動物、来園者による媒介と翻訳	60
(2) 場としての動物園	60

7-3. 動物理解のしかた	61
7-4. 課題と今後の展望	61
注	63
参考文献.....	65
Summary.....	68
謝辞.....	69

表目次

表 1. 飼育員の方々の属性.....	16
表 2. 来園者の方々の属性.....	16

図目次

図 1. 群れの構成.....	18
-----------------	----

第 1 章 序論

1-1. 研究目的

今世紀に入り、「人新世」という新たな地質年代が提唱された。これは「人類による攪乱が、他の地質学的な影響力を凌駕した時代」[チン 2019: 28]を意味する。人類は、地球の大規模な破壊を推し進めた主要な行為者であるとみなされ、「多種の共同体 (multispecies communities)」に人類を結び付ける「状況化された関係性」に目が向けられるようになった [奥野 2021: 45]。人獣共通感染症である新型コロナウイルスのパンデミックにおいては、「ウイルスとの共生」が唱えられるなど、改めて人間は地球環境の一部に過ぎず、自然は人間が管理・統制できる対象ではないということが意識させられた。このことが当然でありつつもしばしば忘れられがちなのは、現代の都市部で暮らす私たちが目にする自然および動物は、主に人間が占有あるいは所有しているものであることと関係していると考えられる。こうした人間とかかわりの深い動物は、目的によって展示動物、愛玩動物、産業動物、実験動物などに分けられている [土居 2014: 164]。動物園動物は展示動物のカテゴリーに属し、人間の管理下に置かれているが、本来野生動物であるという両義性を持つ。本稿では、動物園において、こうした特異性を持つ動物と、飼育員、来園者が複雑に切り結んでいる関係性を明らかにすることを目的とする。その視点および手法としては、多種の人類学（マルチスピーシーズ人類学）からヒントを得たい。マルチスピーシーズ人類学は、上述した人新世の時代において、近代西洋的な二元論および人間中心主義への批判から生まれたという背景を持つ。このため、非人間である動物やものにも行為主体性を認め、同等レベルで扱う。また、二者間の相互作用のみならず、複数種間の複雑な絡まり合いを重視する。さらに、その絡まり合いによって複数種は形づくられるとする生成論的な立場をとっている⁽¹⁾。本稿ではこうした視点に依り、飼育員、動物、来園者の三者間、またそれぞれの二者間において、どのように関係性が生起し、消滅しているか、また互いの存在をどのように形づくり、揺さぶっているのかを記述したい。

1-2. 章構成

第2章では、マルチスピーシーズ人類学を中心に、人と動物の関係に関する先行研究を取り上げ、その中での本稿の位置づけを提示する。第3章では動物園の歴史について、その時代の人びとの自然観や動物観の変遷とともに概観し、人－動物関係の中で動物園がどのような性質を持つ施設として存在しているのかを整理する。続く第4章では、対象となる日立市かみね動物園についての概要を記述する。第5章で飼育員への、第6章で来園者へのインタビュー調査の結果や筆者のフィールドワークにおける観察結果を整理・分析する。それらを踏まえ、第7章では序章で述べた問題意識と対応するかたちで結論・考察を述べる。

1-3. 研究方法

本稿は、既存の文献と、筆者の動物園における参与観察のデータ並びに飼育員と来園者への半構造化インタビュー調査のデータ、質問票への回答をもとに論じる。

文献研究では、人－動物関係や動物園に関する人類学、哲学、歴史学、社会学、生態学などの文献を中心に扱う。各種学術論文、学術雑誌およびウェブサイトから先行研究を整理する。フィールドワークでは、日立市かみね動物園を訪問し、飼育員と来園者へのインタビュー調査と、飼育の様子や来園者の様子の観察を行う。その際に得られたデータや、書面での質問票への回答を分析し、考察する。

第2章 人—動物関係に関する先行研究

2-1. マルチスピーシーズ人類学概要

マルチスピーシーズ民族誌 (multispecies ethnography) は今世紀に入ってから誕生した、現時点で最も新しい研究ジャンルの1つであるといわれている [奥野 2021: 45]。奥野はこの学問の誕生の背景について、以下のように述べる。

民族誌においては通常外部の変数として扱われてきた多種多様な存在を、人間と相互作用し、絡まり合って結びつき、「ともに生きる」存在であると捉え直すことで、この研究ジャンルが立ち上がってきた [奥野 2021: 46]。

ここから、マルチスピーシーズ人類学の特徴を読み解くキーワードがいくつか抽出できる。まず、多種多様な存在という点である。人—動物関係における従来の人類学的研究では、人とある特定の種間という一対一の関係性を扱うことが多かったと大石は指摘する。一対一から一対多の関係へと研究対象の移行がなされた理由について、近藤は微生物などの「多なる存在」を取り上げる「科学技術の人類学」の進展を挙げる⁽¹⁾。奥野は、二者の相互作用と多種の絡まり合いを比較し、後者では「自然／文化という二元論図式の乗り越えが視野に入れられている」 [奥野 2021: 48] と指摘する。さらに彼は、この学問においてマルチ（多）であるのは種に限らないという。多様なキャリアを持つ複数者での共同研究や、「マルチサイトッド民族誌」と呼ばれる、複数の場所で調査を行う手法など、「複数性」は研究活動全般にわたるひとつの指針のようなもの [奥野 2021: 47] であるといえる。

次に、最も重要なキーワードとされる「絡まり合い (entanglement)」について述べる。カークセイとヘルムライヒは、「数多なる生物の暮らしがいかに関政治的、経済的、文化的な影響力を形づくり、また、それによって形づくられるのか」 [カークセイ & ヘルムライヒ 2017: 96] という絡まり合いの結果に関心をもつ人類学として、マルチスピーシーズ人類学を定義する。つまり、この学問では、多種との連関が互いを生成しあうという前提に立ち、可変で動的なものとしての関係から出発する。この概念はチンに

よる「人間の自然（本性）は種間の関係性である」[Tsing 2012: 144] という指摘が端的に表している。さらに、この生成論的、関係論的な見方は、人類学における認識論から存在論への移行、すなわち「存在論的転回」[インゴルド 2018: 23-31; 奥野 2021: 46] とも符合する。

最後に、「ともに生きる」というキーワードについて触れたい。これはダナ・ハラウェイの「伴侶種(companion species)」という考え方に基づいており、先述した「生成」概念とも結びついている。ここでいう伴侶種は、「イヌとヒトのような予め分けられたカテゴリー（飼い主／伴侶動物）を出発点とするのではなく、なんであれ同等の伴侶の関係に引き込み、互いが互いを予測不可能なたちで微視的にも大局的にもつくり変えながら、未決の存在へと一緒に生成していく接触領域⁽²⁾を指す用語」[ハラウェイ 2019] として使われ、通常ペットなどを指す伴侶動物という用語と区別される。さらに彼女は、この接触領域において「"becoming"（～になること）は常に"becoming with"（～とともにになること）」[Haraway 2008: 244] であると述べる。ここでも二元論図式の乗り越えおよび人間中心主義への批判が読み取れる。

ここでいう「人間中心主義」について、人間と自然の関係を扱ってきた生態人類学(ecological anthropology)と比較してみたい。生態人類学は、観察にもとづく計測という客観的な方法論を採用し、動物と相互作用する人間を、文化的適応とりわけ進化学的スキームから理解しようとする[池田 2012: 208]。大石はその相違点について次のように指摘する。「生態人類学では複数種間の関係を扱っていることには間違いないが、研究対象であるヒトの個体や集団がいかに環境と関係を取り結びながら生存・生計上必要な生物資源を入手するか、という点に関心を集中させる。(中略) あくまでも『ヒトの生態』が探求の中心に置かれる」[大石 2021: 77]。これに対してマルチスピーシーズ人類学は、人新世の時代に非人間が行為主体性を持つ存在として捉えられた動き[奥野 2021: 50] とともに誕生したという背景をもつ。このことから、出発時点から人間中心主義へのアンチテーゼとしての多自然主義を内包していたといえる[カークセイ & ヘルムライヒ 2017: 104 ; 奥野 2021: 50]。

2-2. 社会関係とは何か

本稿は、動物園における「社会関係」を描くことを目的としている。前述した議論と重なる部分もあるが、改めて「社会」や「関係」、そして「社会関係」という概念にま

つわる議論を整理し、本稿の立場を提示したい。

まず、ティム・インゴルドの見方を紹介する。彼は、その著作『人類学とは何か』において、社会関係の見方を3つに分類する [インゴルド 2020: 94-119]。1つ目は、互いに対して本質的に閉じた二者間の取引とする、認識論的な見方である。これはトランザクショナリスト（社会的な交換を人間存在の根源的行為であると見なす立場を主張する論者）のアプローチを基礎とする。そして社会を相互行為する同種の集合体として捉える、社会生物学の基盤ともなった。2つ目は、制度的枠組みの中に占める位置関係としての理解である。これは前述した社会生物学の見方を乗り越える試みとしての、構造主義的な説明である。3つ目は、いのちある存在が一緒にやっていくことについて経験するあり方であり、これによってそれぞれの存在はつくられる、とする見方である。インゴルドはこの3つ目の考え方を、唯一真に関係論的な存在論の萌芽を含んだものであるとして支持する。

ブリュノ・ラトゥールも、「社会」について関係論的かつ生成論的な見方を示す。彼はアクターネットワーク理論（ANT）という社会学の方法論を展開したうちの一人であり、その著書『社会的なものを組み直す』の中で、「社会的なものの社会学」と対比させて「連関の社会学」[ラトゥール 2019: 21, 227, 308] というアプローチを示す。社会的なものについて彼は、「実在する領域や特定の対象を指し示すものではなく、むしろ、移動、転置、変換、翻訳、編入の呼び名」[ラトゥール 2019: 122] であるとする。そのような「社会的なもの」は、動的な作用であり、「存在し続けるために新たな連関を必要とする」[ラトゥール 2019: 417]。

ここで、一見「関係」に含まれない種類の関わりあいについて扱った先行研究を提示したい。マテイ・カンデアは、engagement と detachment を対置することに異を唱え、detachment がもつ生産的な側面について主張する。カラハリ砂漠での研究者と彼らの研究対象であるミーアキャットの関係性から、「相互-忍耐(inter-patient= the mutual suspension of action)」という概念を提唱し、この言葉が「関係」の意味の拡張を可能にするという。行為しないことを積極的に示す意味で彼は patience の語を用いる。カラハリ砂漠において、研究者は特定の積極的な介入を控え、ミーアキャットは逃げることを控えるという相互の忍耐関係が detachment として描かれる。これにより研究者の記述は、現実が単なる表現へと飛躍することを回避できるという [Candea 2010: 241-255 (筆者翻訳)]。

以上から、社会とは実在するものではなく、動的な関係性そのものだということがわかる。また、「社会関係」はともに経験するあり方であり、その主体となる存在を生成するものであった。さらに、「関係性」には相互行為だけでなく、相互不行為のようなものも含まれる。本稿では、これらの議論を踏まえ、動物園において飼育員、動物、来園者が互いを変容させ合うことを「社会関係」とし、そのあり方をつぶさに記述することを試みる。

2-3. 動物に対する見方

カンデアの示した inter-patience は、西江が提示する「経験的理解」と「客観的理解」という動物の「二つのわかり方」とも関連する〔西江 2015: 88-90〕。西江は研究者として野生のチンパンジーを調査する際、物理的にはチンパンジーと「出会う」ようにするが、一方で「出会わない」ようにする態度も持っているという。ここで「出会わない」とは、自らの存在がチンパンジーに与える影響や主観を排して観察する態度のことを指す。こうした矛盾した2つの態度の裏には、「フィールドワーカー」としての「経験的理解」と、「科学者」としての「客観的理解」という2つの理解方法の存在がある。個体を識別し、群れの関係性を理解するには、自らが直接的に参加するほかない。そうした直接的な出会いから得た経験的理解は「主観的判断」に基づいた偏見の可能性があるとしても、客観的なデータを集める土台として必要不可欠である。一方で、「客観的理解」では、出会いの痕跡は「ありのままの対象の姿」を「誰が見ても同じようになるしかた」で観察・記録するうえで阻害要因となる。このため、動物研究者は対象に「出会い」、そのうえで「出会っていない」ふりをしなければならないという。西江は、この「経験的理解」の領域に学術的関心を向けることが、動物研究者に与えられた未踏のフロンティアであると指摘する。

一方、「経験的理解」の方法論を重視してきた文化人類学の分野では、固有の文化的背景で語られる動物行動記述に関する研究が多くある。そこでは北米先住民にとって動物と話すことはすべての狩猟者に備わった能力〔山口 2012: 5〕であるという論や、動物が人に変身する〔コーン 2016: 9; 近藤 2012: 178-201〕といった語りも居場所を持つ。フィリップ・デスコラは、内面性と肉体性に基づいて自己と他者の関係を4つの区分に分ける。

この他者が、自分と同一の肉体的・内面的要素を持っている場合。この他者の内面性と肉体性が、自分のものと異なっている場合。内面性は似ているが、肉体性は異質である場合。内面性は違っているが、肉体性は類似している場合。最初の組み合わせを「トーテミズム」、二番目の組み合わせを「アナロジズム」、三番目の組み合わせを「アニミズム」、最後の組み合わせを「ナチュラリズム」と呼ぶことにしよう [デスコラ 2006: 177; 近藤 2012: 183-184]。

ここで自己は人間に、他者は動物にそのまま当てはめることができ、人間と動物の関係を考えるうえでの同定方法の分類と見ることができる。デスコラは、自然科学をナチュラリズムの例として扱った。そして、アニミズムについて「多くのアマゾニア社会が、植物や動物に固有の精神的原理を与え、こうした存在物との間に、人格同士の関係（友好、敵意、誘惑、縁組、サービス交換といった関係）を結ぶことが可能だと考えている」 [デスコラ 2019: 179] と述べる。西江のフレームワークに立ち戻って考えると、このようなアニミズムやトーテミズムの視点を得ることは、動物について経験的に理解することにつながるといえるだろう。

2-4. 小括

ここまで、マルチスピーシーズ人類学という学問の特徴と、社会関係の定義、自然人類学や文化人類学での動物の見方について見てきた。本稿では動物にも行為主体性を認めるという点、複数種の共生について扱うという点でマルチスピーシーズ人類学の立場から出発する。また、本稿が取り扱おうとしている社会関係について、上記に取り上げたような生成論的、関係論的な見方に依るものとした。さらに、飼育員や来園者がどのように動物を理解し、認識しているのかを探ることは関係性を紐解くうえで必要になってくると考える。ここではそのヒントとなるような、「経験的理解」と「客観的理解」というフレームワークがあることがわかった。そして、この経験的理解は、文化人類学の中ではそれぞれの文化的背景のもとで多様な様相で存在すること、また身体性と内面性にもとづいた分類が存在することがわかった。

第3章 動物園概要

3-1. 動物園の歴史と人々の動物観の変遷

本章ではまず、現代の動物園がどのような性格を持つ施設で、どのように形成されてきたかという歴史について、人々の自然観の変遷とともに辿る。次に動物園動物がどのような存在であるかということを家畜との比較を行いつつ見ていく。

(1) 古代・中世の動物コレクションと人々の自然観

狩猟採集から牧畜や農耕へと生活様式が変化する過程で、人びとの自然観も大きく転換した。動植物をコントロールする必要が生じ、「文明／野生」の二項対立が意識されるようになった。この流れの中で動物は、文明に属する「家畜」と、野生に属する「野獣」という、二つのカテゴリーに分けられることとなった。しかしこの野獣に対する人間の態度も一様ではなく、征服すべき対象、崇拜対象、野生との結びつきを想いおこさせるものなど一見矛盾とも思われる複雑さを有していた。

そして、この野獣をむりやり家畜化したのが、後述する近代西洋の「メナジェリー」や現代の動物園の原型ともいえる「動物コレクション」であった。古くはメソポタミア文明やエジプト文明にその起源を見ることができる。このような動物コレクションは所有者の権力や富、諸外国とのつながりの誇示、娯楽を目的として [溝井 2014: 38-39] 世界各地で収集、展示されていた。中南米やインド、中国などでも同様の動物コレクションがあったことがわかっている。さらに、中国の武王がつくった「智識の園」(B.C.1050) やソロモン王 (B.C.974~937) の動物コレクションは、一般市民の教育にも役立てられたといわれている [中川 1975: 14-15; 溝井 2014: 33]。

中世における動物コレクションは、権力と富の誇示という目的のほかに、宗教的意味合いが強いものだった。ここで、西洋の動物観を形成する重要な要素であり、動物園の歴史とも関連する『旧約聖書』について触れたい。

『旧約聖書』は、「創世記」や「地上の楽園」、「ノアの箱舟」など現在の動物園に影響を及ぼしたモデルをヨーロッパ人に示した。『旧約聖書』冒頭の「創世記」によれば、唯一絶対神ヤハウェは、あらゆる動物をつくったのち、神々の似姿としての人間を創造

した。そして、神に代わって動物たちを支配することを人間に委ねたと記されている。また、最初の人間であるアダムとイブが禁忌を破り、神に呪われる以前の世界では、ひとは動物たちとともに仲良く暮らしていたという。これが「地上の楽園」である。中世ヨーロッパの王侯たちは、この世に「地上の楽園」を再現しようと動物コレクションをつくった。英語のパラダイス(paradise)の語源である古代ペルシャ語の「パラディソス(paradeisos)」も古代の動物コレクションを指す言葉であった〔渡辺 2000: 16〕。最後の「ノアの箱舟」は、雌雄をつがいとした網羅的収集というモデルを示した。現代の動物園も自然保護と再生産をその目的に据えているため、しばしば現代版の「ノアの箱舟」とであると自称する〔溝井 2014: 37〕。

ほかに、この時代の自然観に影響を及ぼした著作としてアリストテレスの『動物誌』を挙げたい。ヒポクラテス(B.C.460-375 ごろ)や、アリストテレス(B.C. 384-322)といったギリシアの学者たちは、動物について客観的な分類・研究を行った。のちの中世の学者がこれを再評価し、自然を観察するという態度や、動物を一種の「機械」とする見方の生成に繋がった。

(2) 近世のメナジェリーと自然観

中世期末以降、海運の発達により世界各地で取引された様々なものがヨーロッパに流入することとなった。これにより、王侯貴族の間で「不思議の部屋」と呼ばれる、世界各地の自然物(ナトゥラリア)や人工物(アルフィキアリア)が並べられた空間が流行した。また、17世紀以降、動物を集めた施設は「メナジェリー(menagerie)」と呼ばれるようになった。さらに、巡回メナジェリーという、市民向けのメナジェリーも登場した。この時代につくられたメナジェリーのほとんどは残っておらず、現存する唯一のバロック式メナジェリーは1752年ウィーンのシェンブルン宮殿につくられたものであるといわれている〔溝井 2014: 81-97〕。それまでのメナジェリーが私的なものだったのに対して、シェンブルンのメナジェリーは1765年に市民に開放されることとなる。このことから近代的な動物園のはじまりであるとされる〔中川 1975: 18-19; 成島 2012: 227〕。さらにこうした近世のメナジェリーでは、動物の研究もおこなわれていた〔溝井 2014: 104〕という。

14世紀から16世紀にかけて動物学は著しく進歩し、動物に対する議論も活発化した。その発端となったのが、動物を一種の機械とみなしていた中世の見方に神学的根拠をく

わえた「動物機械論」である。これはルネ・デカルト（1596-1650）がその著作『方法序説』のなかで提唱した考えで、動物を機械とみなし、思考できる能力がないとするものだった。これに対して真っ向から対立する意見も登場するなど、17-19 世紀にかけて哲学者の間での論争を巻き起こした。こうした議論が興隆した背景には、かつて信じられていた人間と動物の境界線を揺るがすような科学の進歩があった。17 世紀半ばには、動物もある種の言語を使っているといわれるようになった。さらに、類人猿の存在が知られるようになったことや比較解剖学の進展から、人間と動物の間に根本的な差異がないことが明らかになった。

(3) 近現代の動物園の特徴と存在意義

19 世紀に入ると、近代的性格を持った動物園が次々とつくられる。これらは一般市民に開放されたというだけでなく、「一般市民によって」[中川 1975: 20] 設立された点に特徴があった。また、自然科学を基盤に誕生したことも大きな特徴であるといえる [中川 1975: 20; 溝井 2014: 139-140]。なかでも現代の動物園のモデル的立場とされるのは、1828 年に開設されたロンドン動物園である。ロンドン動物園は動物学協会の附属機関として設立された。その設立目的は「動物学および動物生理学の進歩、および動物界における新しきものの紹介 (The advancement of zoology and animal physiology and the introduction of new and curious subjects of animal kingdom)」と明示されている [中川 1975: 20-21; 村田 2014: 1]。日本で最初に設立された上野動物園も、このロンドン動物園やパリの動物園を参考にした博物館附属施設として 1882 年に誕生した [中川 1975: 29]。ところで、19 世紀以降の動物園に影響を与えた出来事として見過ごせないのがダーウィンによる進化論である。人と動物が同一の祖先から分岐したという言説は、神の似姿としての人間というキリスト教的な認識を否定するものだった。そして、人と動物の境界はさらに曖昧なものとなった。動物園には人々が訪れ、類人猿を見ることに熱狂した [溝井 2014: 158-175]。

20 世紀初頭には、自然な展示のイメージをもとに、檻のない動物園であるパノラマ方式 [川田 2014: 7] が指向されるようになる。しかし、その後衛生観念の高まりのもと、コンクリートの床にタイルの壁、鉄扉というタイプの獣舎の時代が再来する。さらに時代が下った 50 年代から 70 年代では、環境保護運動や動物の権利運動の高まりとともに、動物園の存在意義が問われるようになった。ここから、動物園では環境一体型

展示、生態展示、バイオパークといった展示方法の工夫がなされる。21 世紀現在では、保全の取り組みが強調され、持続可能な動物園、環境センターとして転身を図ろうとしている [Hosey *et al.* 2009: 26-49]。こうした流れを経た現代の動物園には次の 4 つの存在意義があるとされる。種の保存 (conservation)、教育・環境教育 (education)、調査・研究 (research)、レクリエーション (recreation) である [村田 2014: 1]。種の保存は、先述したような環境保護、自然保護のためのものである。具体的には、野生動物の域外保全の場として活用される。野生動物は本来生息域内での保全が優先されるべきであるが、それが困難な場合に動物園などで保全されることとなる。二番目の教育という点では、自然保護の推進や動物の生態的知識において、経験を通じた生の教育を提供する。この意味で、学校を教育の本流と位置付けるとき、動物園は教育の補足的役割を担う。そして、ロンドン動物園の設立目的として明示されていたように、研究の場としての動物園には大きな役割が期待される。最後のレクリエーションについて中川は、2 つの意味で解釈する。一つ目は従来用いられている慰楽という意味、二つ目は re (再び) create (創造) するという意味である。一つ目の意味において動物園は、人間の本性としての動物たちと接したい、見たいという欲望を満たしてくれる場である [中川 1975: 73]。二つ目の意味においては、人間が文化生活の中で失いつつある生物としての側面を取り戻し、人間自身をつくり直す契機をくれる場である。さらに中川は、私たちが動物園でいい知れぬ安らぎを得る理由として、人間と動物が同じ空間を共に生きているという実感を感じ取るからだと説明する [中川 1975: 74-77]。そして、これら 4 つの意義は互いに関連し合っている。

3-2. 動物園動物という存在

(1) 動物を人為的な環境に取り込むということ

この節では動物園動物がどのような存在で、どうあるべきかという問いについて考えたい。先に述べたように、動物園動物は展示動物の一種であるが、そのほとんどが元来野生動物でもある。一部家畜動物とされる動物も展示されているが、ここでは野生動物を飼育下に置くという場合限定して「動物園動物」を定義し、論を進めたい。動物園動物が家畜と異なる点について、中川は以下のように述べる。

家畜になった動物たちは、それが野生生活をおくっていた時代から、家畜になり

やすい条件をもっていたにちがいないし、現在野生動物として残っているものは、それをもちあわせていなかったとも考えられる。このことは、現在の家畜が、はるか昔から家畜として成立しており（イヌ B.C.8000, ネコ B.C.2500, ヤギ B.C.7000, ヒツジ B.C.6000, ウシ B.C.4500, ニワトリ B.C.2500 など）、その時代以降、多くの動物について、家畜化の試みが、いずれも失敗に終わった事実によっても明らかである。ということは、現在の野生動物たちが、家畜になることを拒否し、人間に飼育されることに、大なり小なり抵抗を感じずる種類だ、ということになる。それゆえに、動物園に飼育する動物たちの飼い方は、家畜と異なった意味での困難性や、特異性が存在するのである [中川 1975: 109-110]。

ジャレド・ダイヤモンドの説を取り上げ、中川の論を補強したい。ダイヤモンドは、トルストイの『アンナ・カレーニナ』の冒頭になぞらえて次のように述べる。「家畜化できている動物はどれも似たものだが、家畜化できていない動物はいずれもそれぞれに家畜化できないものである」 [Diamond 2000: 289]。彼は、飼育と家畜化には大きな違いがあるとし、人間が食餌や交配をコントロールし、品種改良する過程が含まれるものが家畜化であると定義する。さらに、家畜化の初期段階としてペットを位置付ける。ペットになった動物のうち実際に家畜化に成功した動物は一握りにすぎない。ダイヤモンドは家畜化に失敗した動物が成功した動物より圧倒的に多い原因について、人間側の文化的問題ではなく、動物側に問題があったことを指摘する。つまり、家畜化に適した条件を動物側が持ち合わせているかが家畜化の成否を分け、それは一つでも欠けてはならない必要条件なのである。

ラディカ・ゴヴィンドラジャンは別の視点から家畜動物と野生動物について述べる。彼女は、その著作についてのインタビューで以下のように述べる⁽³⁾。

私はすぐに、野生動物と家畜動物といった分類は歴史的背景に左右され変化するものであって、その境界は常に曖昧であることに気がつきました。例えば、ヒョウが村をうろついて人を襲うのは、神々が「バリ」、つまりは家畜の生贄を望んでいることを示しています。ゆえにヒョウは神々にとっては家畜化された動物なのだ、と村人が私に言ったことがありました。こうした分類における流動性が、様々な動物がどのように異なる場所に出入りしているのか、もっと深く考えてみたいと思う

きっかけです。それによって、「野生動物」という自明で不変の分類に違和感を覚え、人間と人間以外の動物が日常的に遭遇していくなかで、このような分類が、いっとうして意味を持つようになったのかを考えるようになりました。

この指摘は、誰にとって意味をもつ分類かということを考えさせてくれる点で示唆に富んでいる。上記のダイヤモンドの定義は近代社会に生きる私たちの多くにとって有用かもしれないが、絶対のものではない。来園者も、知識として動物園動物が本来野生動物であることを知ってはいても、ときとして飼育動物としての側面のみを見て、愛玩動物などに投影する場合もある。こうしたとき、その人にとって動物園動物が野生動物であることは意味をもたないということが言えるだろう。これらの議論から、動物園動物において、両義的な特異な存在であること、また分類に潜む主観性を認識する必要があるといえる。

(2)動物福祉と環境エンリッチメント

動物福祉について、世界動物園協会は以下のように定義している。

動物がその生活環境にどう対処しているかということ。(科学的根拠により示唆する)良好な福祉状況とは、健康で快適な、栄養状態のよい、安全で生得的行動を表現でき、痛みや恐怖、苦しみなどの不快な状況にない動物ということになる⁽⁴⁾。

この動物福祉は人間が占有あるいは所有する動物に対する考え方であるとともに、その方法でもある [土居 2014: 164]。歴史的に動物福祉の考え方は動物愛護運動や動物権利運動の影響を受けてきた。19 世紀から 20 世紀にかけては、動物愛護法、動物福祉法などが各国で整備された。動物園における動物福祉は、先に述べたように実践的な方法としての意味も持つ。具体的には、「給餌回数や時間、飼育場所の植樹と樹種、代替の人工物の造作など多岐に及ぶとともに、種によって、あるいは個体によって一時行動や社会行動なども異なっていることから、きわめて個別的な問題ともなっている」[土居 2014: 169]。

これを達成するための手法として環境エンリッチメントという概念がある。環境エンリッチメントとは、「飼育下に置かれている動物の環境に対し、追加あるいは変更を加

えて野生での自然な行動を引き起こし、それが動物の福祉につながるという考え」〔細田 2014: 169〕である。環境エンリッチメントには道具、居住空間、餌、五感刺激、社会的構造などいくつかの種類があり、それらを組み合わせることによって、動物の生活を豊かなものにし、本来の行動を引き出すことに貢献する。例えば、チンパンジーやオランウータンに対して、人工アリ塚と餌のジュースの組み合わせというエンリッチメントの方法がある。穴に差し入れするための枝やワラなどの素材を多様にするすることで、さらに動物の行動の質と量を増大させることができる〔細田 2014: 170-171〕。

第4章 現地調査概要

4-1. 調査地概要

かみね動物園は茨城県日立市の高台に位置するかみね公園内にある、茨城県唯一の動物園である。市営の施設であるかみね公園の敷地内には、他に遊園地とレジャーランドがある。現在では100種536点（2020年12月末日時点）の動物を飼育している。

昭和32年（西暦1957年）に開園した当時は、ニホンザル、クマ、シカ、キジの4種類を飼育していた。その後、飼育動物種を増やしていき、昭和42年（1967年）には北園エリアがオープンした。もともと野球場だった場所を改装し、現在でも当時と変わらない形でシマウマ舎、サイ舎、カバ舎が建っている。同様に北園エリアに位置するキリン舎は、平成26年（2014年）に改築がなされた。同年サル山を整備し、ニホンザルも北園エリアに移動した。50年以上サル山で暮らしてきたニホンザル達だったが、老朽化のため園の中央付近に新たなニホンザル舎を設計し、2020年12月にそちらに移転した。

ここで、インタビュー内にも登場する「もぐもぐタイム」について説明する。かみね動物園で実施しているもぐもぐタイムは、来園者自ら動物にエサを与える体験や、飼育員が展示場内の動物に給餌する様子を見学することができるイベントのことを指す。すべての飼育動物で行われているわけではなく、その形態も動物種によって異なる。現在は新型コロナウイルスの影響で、一部中止している獣舎や、見学に切り替えている獣舎もある。今回調査した動物の中でもぐもぐタイムがあるのは、キリン、マンドリル、チンパンジーの3種である。

4-2. 調査対象飼育員概要

本節ではインタビュー調査にご協力いただいた6名の飼育員の方々の属性と対象動物について記述する。個人情報保護の観点から、調査対象者の個人名は伏せ、アルファベット表記とした。なお、調査方法としてA～Dには対面でのインタビューと書面での質問の両方を実施した。E、Fに関しては書面でのやりとりのみを複数回実施した。

かみね動物園では、担当者（本担当）と代番者（サブ担当）がペアで1つの動物種

を担当している。担当者は週に 5 日、代番者は残りの 2 日を担当する。

	担当動物	飼育員歴	現在の飼育舎の担当歴
A	ニホンザル担当者	5 年目	2 年半（サブ担当も含めると 5 年）
B	チンパンジー担当者	11 年目	6 年目（サブ担当も含めると 11 年目）
C	チンパンジー代番者	10 年目	1 年半サブ担当
D	サルの楽園担当者	8 年目	6 年目
E	キリン担当者	7 年目	7 年目
F	シマウマ担当者	3 年目	3 年目

表 1. 飼育員の方々の属性（筆者作成）

4-3. 調査対象来園者概要

ここではインタビュー調査を行った 10 組の来園者について記述する。それぞれの属性と来園頻度は以下の表を参照されたい。なお、それぞれの名前については、2 節と同様に個人情報保護の意味合いから数字表記とする。

	年齢／性別／構成	来園頻度
来園者①	3 歳の女の子、63 歳女性、65 歳男性（祖父母と孫）	毎週
来園者②	41 歳男性 1 人	3,4 年ぶり
来園者③	47 歳女性、31 歳女性、33 歳女性（友人同士）	2 人ははじめて。1 人は無回答。
来園者④	23 歳女性 1 人	年 2,3 回
来園者⑤	19 歳女性、22 歳男性	3 回目（女性の方のみ回答）
来園者⑥	40 歳女性、3 歳男の子	3 か月に 1 回
来園者⑦	51 歳男性、3 歳の息子、母親の 3 人家族	3,4 か月に 1 回
来園者⑧	7 人の友人同士。15 歳と 25 歳の女性が回答	7 年ぶり（15 歳）、はじめて（25 歳）
来園者⑨	45 歳男性 1 人	子どもの頃から 40 年以上通っている。
来園者⑩	38 歳女性 1 人（7 歳の娘がいる）	自分は子供の頃から来ていたが、中学生くらいから来なくなり、大人になってからは年に 2,3 回。子どもの幼稚園入園以降は週 1～3 回。

表 2. 来園者の方々の属性（筆者作成）

4-4. 調査対象動物概要

以下に、同動物園における調査対象の動物についての概要を記述する。

(1) ニホンザル舎

展示場に出ているのは 86 頭。寝室に 2 頭、白内障で目が見えなくなったオスとメスの老齢のニホンザルが隔離されており、合わせて 88 頭のニホンザルを飼育している。

血統の更新はされていない 1 つの群れだが、A によれば内部で派閥はあるように感じられるとのことだった。1957 年に島根県の山から 43 頭で群れごと連れて来られたため、今いる個体はすべてその子孫にあたる。今までのデータでは個体識別をされておらず、現在マイクロチップを入れ、個体識別を目指している段階にある。

(2) チンパンジー舎

展示場に出ている 7 頭と、今年 8 月に生まれたチヨという赤ちゃんの計 8 頭。7 頭のうち、オスは前リーダーのゴヒチ（推定 43 歳）、現リーダー（アルファオス）でゴヒチの息子のユウ（29 歳）とリョウマ（9 歳）の 3 頭。メスはリョウマの母であるマツコ（推定 43 歳）、最年長ヨウ（推定 50 歳）、2016 年に来園したイチゴ（13 歳）、2021 年 3 月に来園したばかりのフク（9 歳）の 4 頭。

赤ちゃんの母親はイチゴだが、父親はまだわかっていない。アルファオスと呼ばれる群れのリーダーの座は 4～5 年前にゴヒチから息子のユウに譲られた。現在のメンバーになったのは今年になってからであり、以前いたメスのゴウ（10 歳）が 2021 年 3 月によこはま動物園ズーラシアに移動し、入れ替わりで新たにメスのフクが同動物園からやってきた。

それに伴う群れ内の社会関係や順位の変化、それぞれの個体の生い立ちについては後述する。

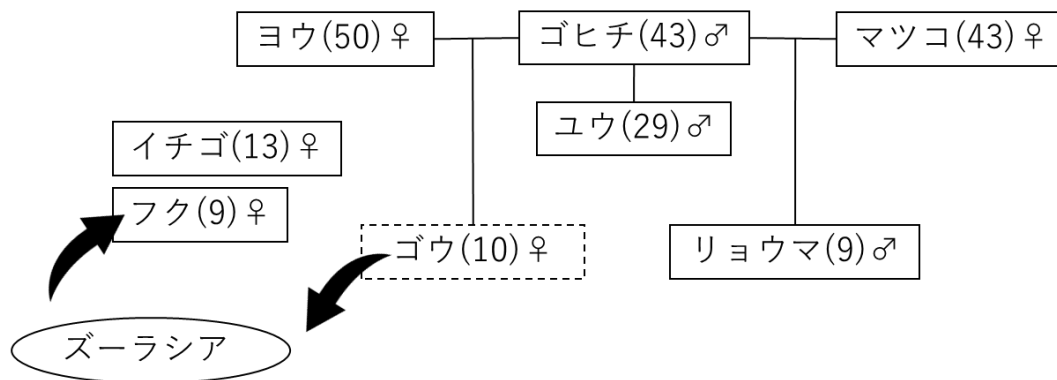


図 1.群れの構成

(インタビューより筆者作成。※今年生まれたチヨは含めていない。)

(3)サルのレストラン

飼育動物はボリビアリスザル（以下リスザル）、ブラッザグエノン、サバンナモンキー、フサオマキザル、マンドリル、ワタボウシパンシェ（以下パンシェ）、ジェフロイクモザル（以下クモザル）、コモンマーモセット（以下マーモセット）の 8 種類。

リスザルは全部で 8 頭いる。日中は、「リスザルの島」と呼ばれる周囲を池に囲われた場所に放し飼いにされている。来園者はこの島内を通行することができ、檻を介さずにリスザルを見ることができるウォークスルータイプの展示場となっている。リスザルは他園の 1 つの群れから若い個体が選ばれ、来園した。そのため、今現在いる成体は近い血縁関係にはないが、かみね動物園生まれの 3 個体は同一の父親を持つ異母兄弟である。

パンシェは全 7 頭であり、1 つの家族を隣り合った 2 室に分けて飼育している。父のいっちゃん（10 歳）、息子のシゲル（4 歳）、ウリ（3 歳）、ニーヤン（2 歳）のオス 4 頭が右側の部屋で飼育されている。メスは左隣の部屋で、母のはる（12 歳）、娘のやま（5 歳）、よつば（3 歳）の 3 頭が飼育されている。パンシェは年に 2 回繁殖可能である。この群れも、もとは全頭が 1 つの展示場で飼われていたが、つがいの相性が良く飼育可能頭数に達したため、雌雄別離という形を取るようになった。

マーモセットもサルのレストランではメス群れで飼育している。オス群れは後述する爬虫類館の方で展示されている。ブラッザグエノンは、オスのピットとメスのモモ、ゴマの 3 頭がいる。クモザルは親子 3 頭で、それぞれ父のジン（15 歳）、母のトモコ（25 歳）、息子のハルカ（1 歳）。フサオマキザルも親子 3 頭で、父のフトシ（31 歳）、母のユメ

(23 歳)、息子のタケシ (2 歳) である。サバンナモンキーはオスのケビン (推定 14 歳)、メスのサナ (20 歳) の 2 頭で飼育されている。マンドリルはオスのケンシロウ (15 歳) とメスのリエル (11 歳) の 2 頭。

(4) キリン舎、シマウマ舎

キリン舎とシマウマ舎は隣り合っており、ホロホロ鳥が両方の獣舎の内外を行き来できようになっている。アミメキリンは親子 3 頭で、それぞれ父のシゲル (17 歳)、母のキリナ (12 歳)、娘のクルミ (1 歳)。ハートマンヤマシマウマは現在メスのキララ (8 歳) 1 頭のみで、以前複数飼育していた際も別々の場所で放飼されていたという。

第5章 飼育員の語り

本章では、インタビュー調査の結果をもとに、飼育員の語りについて整理する。インタビューとしては大きく分けて次の5項目を明らかにすることを目的として質問を行った。(i) 飼育員から見た動物同士の関わり、(ii) 飼育員と担当動物の関わり、(iii) 飼育員と来園者の関わり、(iv) 来園者と動物との関わり、(v) 飼育員の動物観・自然観・動物園観。

5-1. 飼育員から見た動物同士の関わり

ここでは、動物園内の動物間の関係に着目したい。飼育員目線での語りを記述することによって、直接動物に聞くことが困難である動物同士の関わりについて描き出すことを目的とする。

一頭で飼育されているシマウマを除いて、A～Eは担当動物に社会性があると思うと回答した。理由として、Dはサルの楽園の動物はどの種も群れで生活する生き物だからというふうに述べた。Aも同様に群れで暮らすという点を挙げ、関係性構築のためにコミュニケーションを取っている様子など、他個体との接触全般において社会性を感じると回答した。シマウマを担当しているFは、担当しているキララについては単独で飼育されているため社会性の有無は明言できないが、シマウマは本来群れで行動する動物であるため、社会性のある動物であると話した。以下、それぞれの獣舎における社会関係について見ていきたい。

(1) ニホンザル舎

Aは担当するニホンザルについて、1年前の獣舎移転によって群れ内の社会関係に変化が生じたと語った。以前の展示場の時は順位が高かった個体が攻撃されるようになり、逆に低かった個体の順位が上がり、強めの態度に出るようになるといった変化があったという。また、以前よりも派閥化し、闘争が増えたと言った。理由についてAは2つ挙げた。1つ目は、群れを移動させた順番ではないかという。万一脱走経路があった際のリスクヘッジのために、約10頭ずつ徐々に移動させたが、その際の順番が良くなか

ったのではないかと分析する。2 つ目は展示場の広さが関係していると述べた。展示場が以前より狭くなったことで、かつてなら関わらない距離を取ることが可能だった個体同士が近づいてしまい、闘争が増えたという。

獣舎移転は動物園という場ならではの特殊な出来事であり、それにより群れの社会構造が変化したという点は特筆したい。また、次の節で詳述するが、この出来事が飼育員と動物の関係にも影響を及ぼしたという。

(2) チンパンジー舎

次に B と C が担当するチンパンジーについて、群れ内の社会関係に関する語りを紹介したい。はじめに、現在の群れの成り立ちとそれぞれの個体についての概略を説明する。

2008 年に現在のチンパンジーの森という展示場ができる前は、ゴヒチ、ユウ、そしてルナというメスの 3 頭のみだった。ルナはユウの推定 24 歳年上であり、ショー上がり⁽⁵⁾で少し気性が激しいところもあったが、5 歳で母を亡くしたユウを厳しく育てあげたという。そのためユウは委縮しながら育った部分があり、優しくおとなしい性格だという。ゴヒチも、アフリカの野生の群れ内で誕生したが、2 歳ほどで来日し、以降は実験動物として飼われていたため、普通の群れでは育っていない。そのためか、群れのルールについてあまり厳しくはないようだ。B も C もゴヒチの性格について、かなり優しく寛容であると語る。移転した際に、ヨウ、マツコ、そして現在は池田動物園にいるジュンコが加わり、群れづくりが始まった。いずれのメスも若い頃ショーに出ていた個体だったため、他のチンパンジーと暮らした経験が乏しかった。コミュニケーションを大切にするチンパンジーにとって、挨拶は重要となる。野生の群れや他の動物園では、挨拶がしっかりできないと厳しく怒られ、場合によっては群れに受け入れてもらえないこともある。実際にマツコも以前の動物園では群れに受け入れてもらえず、ずっと一人で過ごしていたという。しかし、ゴヒチはそんな彼女たちにも怒ることはせず、群れの一員として迎え入れたという。こうして群れが完成し、2011 年にはゴヒチとヨウの間にゴウが、2012 年にゴヒチとマツコとの間にリョウマが誕生した。2 頭とも人工哺育にはなったが、その際も 1 年ほどで群れに入ることができたという。

また、同年 2012 年に当時 17 歳のメスのチンパンジー、ナナが宇都宮動物園から来園した。このときユウは 20 代半ばの最も「イケイケの」時であり、ゴヒチからユウへ

のアルファオス代替わりの過渡期にあった。B は当時の状況について以下のように語った。

B「亡くなってしまったんですけど、新しい女の子が、ナナっていう子が、7、8 年前に来園した時に、ユウくんの中で、それまでいたメスっていうのが、ユウくんよりも年上で、厳しめのおばちゃんしかいなかったの。そこにこう、若い女の子が来たので、ユウくんも『あ、若い女の子が来た』っていうので、『自分も頑張んなきゃ』っていう雰囲気だったと思っていて。もうナナちゃんは亡くなってしまったんですけど、そこら辺から自信をつけ始めて…。徐々になっていく感じかな…何か大きいきっかけが（あったというよりは）。まあ一番大きいのはそのナナちゃんが来たことでユウくんの中で気持ちが切り替わったんだろうなっていうのはあったんだけど。」

他にも、第一位のオスが自らを誇示するときに良く出すといわれる声を、ある時からゴヒチが全く出さなくなったという。さらに、テリトリーをパトロールする際の順番にも変化があったそうだ。ゴヒチ、ユウの順に 2 頭並んで運動場の中を巡回していたのが、ユウが先頭に立ち、ゴヒチが後からついていくというふうに変わっていったという。

野生では、トップのオスを蹴落とすのに 2 番手や 3 番手がタッグを組んで闘争を仕掛けることがある。逃げる場所も少ない限られた空間である動物園でも、下の代が力をつけ、闘争を仕掛けることが多い。いずれも負けたオスは群れにいられなくなってしまうことが多々あるという。しかし、同園ではユウが父であるゴヒチのことがとても好きだったため、追い出すことはせず、2 頭で群れを守っているというような関係が築かれているという。今でも問題発生時にゴヒチが最前線に立ってしまうなど、ユウが少し頼りない側面もあるそうだ。

そして 2016 年に当時 8 歳のイチゴが来園した。イチゴも来園前までは人工哺育で育ち、チンパンジーの群れで暮らすのは初めてだったためにコミュニケーションが苦手だった。しかし、彼女もゴヒチやユウの器の大きさに助けられ、群れに受け入れられたという。B は印象的だったことについて、「アルファオスのユウは自ら近づくことはせず、イチゴが寄ってくるまで待ち、姿勢を低くして怖がらないようにしていた。元アルファオスのゴヒチもまだ 5 歳前後だった子供たちがイチゴをからかっているとすぐに怒り

にいてくれている」と語った。今でも少し違う事や多少失礼な事をしているが、許してもらえているという。

2021 年にはゴウと入れ替わりでフクが来園し、今回の調査開始時の群れの状態が完成した。C は、ゴウがいなくなったことにより、年の近いリョウマが自分や来園者に向ける態度にも変化があったと語る。リョウマとゴウと C の関係については次節にて詳述する。またフクについて、群れのルールをよく破っていると B は語る。ルールの厳しい群れから、ルールの緩やかなかみね動物園に来たことや、新入りであり、かつ若いメスであるために他のチンパンジーから優しくされ、調子に乗っているように感じるという。

次に、群れ内のルールについてまとめる。群れによって差があるが、挨拶と、順位に関わらず他の個体の食べ物を取らないという2つは基本であるという。またこの群れでは、展示場における給餌の際のポジションもある程度決まっているが、それをフクは守っていないという。他の個体が食べているものを取りに行ったフクがゴヒチに怒られている様子を筆者も目撃した。しかし、「前アルファオスのゴヒチが怒りに来ている、現アルファオスであるユウが怒りに来ていないから大丈夫とフクは考えて調子に乗っている」と B は語った。

ここで、群れ内の順位を紹介すると、上から順にユウ、ゴヒチ、ヨウ、マツコ、イチゴ、リョウマ、フクとなっている。この群れにおいてメスはそこまで順位が厳密ではないが、一般的に高齢で子育て経験が豊富なメスの方がオスに好かれるため、上記のような順位になっている。しかし B によると、フク自身はヨウとマツコの間くらいの順位だと思っているだろう、と話す。

(3) サルの楽園

続いて、サルの楽園における群れ内外の社会関係について見ていく。群れ内の関わりについて、まずパンシェのエピソードを取り上げたい。パンシェとマーモセットは先述したようにオスとメスを分けて飼育している。一緒に暮らしていた時と比較して何か変化があったかと問うと、D は以下のように述べた。

D 「メスは特に問題なく…、まあ基本的に家族で過ごすおサルさんではあるので、オスメス分けたからって言うよりは、子供の成長に伴って、性成熟も迎えていって。

基本的に一緒に過ごせるは過ごせるんですけど、お父さんと一番年上の（男の）子で、ちょっとやっぱり不穏な空気がたまに流れることはあります。ただ夜になるとみんな一緒に寝始めたりするのでそこは不思議だなあって思いますね。」

父親のいっちゃんと長男のしげるの関係については、年下の息子たち 2 頭は介入しないという。特にしげるは何もしていないにも関わらず、一方的にいっちゃんが逃避行動を取っている状態だそう。

次にマンドリルの事例を紹介する。メスのリエルはオスのケンシロウの動向を伺いながら行動しているという。

D「結構メスはオスの動向を伺いながらって感じなんですよ。エサを持って行ってあげると、オスがいてときって絶対近づかないんですよ。で、オスにあげながらこう（片手ずつで 2 頭にそれぞれエサをあげる仕草をしながら）あげてると、それは取って食べるんですけど、オスがいのに取りに行くと怒られるというか、結構（オスが）激しく追い払うような行動をしたりとか、ちょっと鳴き声というか『フンフン』って言ったりとかするので。それがわかっているからなのか、オスをチラチラ見ながらエサを取りに来たりはしますね。トラブルを避けているのか、単純にちょっと怖いからなのかは分からないですけど。」

この関係性はハズバンダリートレーニング（Husbandry Training）にも影響しているという。動物園におけるハズバンダリートレーニングは、動物の健康管理を目的とした受診動作訓練が中心となる。それは、動物を従わせるという概念ではなく、オペラント条件付け⁽⁶⁾等を用いた正の強化トレーニングにより、動物が受診や検査行為に自発的に協力してくれることを目指す [柴田 2014: 35-36]。正の強化子として水やエサを用いるため、ケンシロウに対して行う場合は問題ないが、リエルに行う場合は普段の給餌同様、ケンシロウに遠慮してしまい、スムーズにいかないという。

次に異種間の関わりについての事例を 3 つ紹介したい。まず、リスザルの島を囲んでいる池に生息する鯉とリスザルの関係について取り上げる。人工哺育されていたゲンキ（2 歳）だけ、鯉がたくさんいるところに平気で近づいていくという。他の個体でこう

した行動が見られない理由は、リスザルの生態的に泳げないためではないかと D はいう。野生でも水を飲むとき以外は積極的に水の方に行くことはない。D は、もしも陸地に生息するカメのような生き物がいたとしたら、甲羅を叩くなど積極的に近づいていく可能性はあると示唆した。実際に筆者も、他の個体が園内にいるトンボを食べている様子を目撃した。

2 つ目は、サルの楽園内の関わりである。マンドリル舎、ブラッザグエノン舎、フサオマキザル舎の上空に回廊が渡してあり、マンドリルはこの回廊内を歩いて他の獣舎の手前まで行けるようになっているため、そこでの関わりがあるという。しかし、仲がいい場面は見たことはないという。マンドリルのメス（リエル）とブラッザグエノンの群れ、フサオマキザルの群れとの間でそれぞれ喧嘩に近いものが頻発するそう。リエルの方から檻内に手を出すなどして挑発することあれば、ブラッザグエノンやフサオマキザルから手を出すこともある。マンドリルのオス（ケンシロウ）はというと、リエルが激しく声を上げることがあれば、それに反応して近づき、足を鳴らす、フンフンという鼻息のような声を発するなどの行動をすることはあるが、あまり積極的に介入することはないという。ただ、ブラッザグエノンなどは人間に対しても同様に厳しい反応を示すことがあるため、マンドリルに限った行動ではないかもしれないとのことだった。

3 つ目は、サルの楽園ではなく、「はちゅうるい館」内ではあるが、マーモセット、リクガメ、グリーンイグアナの 3 種混合展示について触れたい。前述したように館内のマーモセットはオス群れであり、メス群れはサルの楽園にいる。混合飼育の様子について聞くと、基本的にイグアナが幅を利かせており、マーモセットはイグアナの動向を伺いながら周囲を飛び回り、カメは存在を無視されているというような関係性だという。エサもイグアナが初めに食べはじめ、それを盗むようにマーモセットが食べ、地面に落ちた残りをカメが食べるという順番だそう。野生状態と似たような関係とは言えないが、距離感を保ってお互いに問題なく過ごしているという。さらに、D はこの獣舎の方がマーモセットの生育に適した環境だという。

D「爬虫類（館）の方がここよりいいんですね。暖がちゃんと取れて、設備がしっかりしているので。（中略）環境がすごい、見合っているというか適しているので、そこに間借りじゃないですけど、させてもらっているような感じは。ただ、やっぱりいきなりサルが現れるので、インパクトはかなりあって、マーモセット

の『展示効果』は向こうの方がこっちより高いかなっていう印象は多少あります。いきなり、(館内の他種は)毛が全然ないのに、毛がある動物がバツて現れると、ここにいるマーモセットよりは注目されているかなと。結構、ここを通りかかって『あ、爬虫類のところにいたよね』っていうような声は聞くので。それなりに印象に残っているんだなっていうのはありますね。」

ここでは、快適な住環境の提供という「動物福祉」と、来園者のための「展示効果」が両立していることがわかる。この「展示効果」については同章の第6節で詳しく述べる。

(4) キリン・シマウマ舎

まず、キリン同士の関わりについて E は、親子の関係がオス同士の関係に変化したことが印象的だったという。子が1歳を過ぎたころ、ネッキングが始まったことから関係の変化が観察できたという。E も F も、ホロホロチョウとキリンやシマウマは積極的に影響し合っている様子は見られないと述べた。ただ F は、シマウマが夕方の収容時間が近くなると、エサが用意してある寝室に入りたいのに入れないイライラからか、ホロホロチョウに当たり散らすことがあるという。またホロホロチョウも、日中シマウマに与える青草を盗み食いできるという点では恩恵を受けていると述べた。

シマウマとキリンの関係についても E、F は大きく影響し合っていないように見えるとしたうえで、2つエピソードをあげた。1つ目は、キリンがちょっかいを出し、シマウマが嫌がる様子が見られるというものである。シゲル(キリンのおとなオス)がキララ(シマウマ)の発情期に臀部のにおいを嗅いだり、キララの背中や頭などを吻でタッチしていたりする姿を見た事があるとのことだった。また、クルミ(キリンの子)が、興味本位でにおいを嗅いだり顔を近づける様子が見られるという。2つ目は逆に、キリンが展示場にいないとき、シマウマがキリンの展示場に出たがることもあるというものである。キリンが早めに寝室に入った際に、キリンの展示場にシマウマを放飼することがあり、それを覚えているのではないかと F はいう。

ホロホロチョウと他の二種の関係については野生下とほぼ同様であると窺える。キリンとシマウマに関しては、別の種として互いの存在を認識し、興味を向けることがあるということがわかった。さらに、キリンのオスがシマウマのメスに対して行ったように、

種という分類を越え、性別という分類によって相手を認識することもあるということがわかる。



写真1. キララの檻をのぞき込むシゲル（筆者撮影）

本節では、動物園という場で展開される動物同士の関係について記述することを通して、人と動物を同等レベルの行為主体として扱うことを試みた。良好な関係や陰悪な関係など多様な関わりが見られたが、野生下では関わり合うことがないような種同士の関わりが生まれていた点、獣舎の移転や動物の移動などの事情により社会関係に変化が生まれていた点は動物園に特有の出来事であったといえる。さらに、飼育員がどのように動物同士の関係について理解し、記述するのかという点は第5節の動物観にもかかわってくる。

5-2. 飼育員と担当動物の関わり

ここでは、飼育員に担当動物との関係性について聞いた回答を整理する。質問は(i)相互の働きかけ、(ii)動物から飼育員がどのように認識されているか、(iii)動物との望ましい距離感などの内容を中心に行った。飼育員が動物をどのような存在として認識しているかについては第6節に詳しい。

(1) ニホンザル舎

先述したように、ニホンザルは個体識別を試みている段階にあるが、飼育員として日々見ている A は強い個体といつもやられている個体は見分けがつくようになったという。自分も群れの一員だと思うか、と A に訊くと、人間は別物として認識されているため、ニホンザルの群れに入れることはないと回答した。ただ、「こいつには強く出てもいい」といった判断はしているという。その意味では、群れ内の順序には含まれていなくても、個体間での優劣の判断対象にはなっているのかもしれない。また、スタッフが制服を着て 4~5 人ほど集まると、何か始まるということを感じ、騒ぐという。そのため、A は職員と来園者は見分けているのではないかと見る。さらに A や代番者が給餌の時間帯に近くを通ると、「エサをくれ」という声⁽⁴⁾を出すという。担当ではない職員が通ってもあまり鳴くことはないため、飼育員の中でも区別がついているのではないかと話す。

A から働きかけることはあるのかという問いに対しては、関連付けて言葉を発することは特にないと回答した。時折「ご飯だよ」といった声かけをしたり、場合によって低い声を出して威嚇することはあるという。ただ、「それが本当に通じているのかとか機能しているのかっていうと、こっちの気持ちなのかなとは思いますが」と語った。それを受けて、通じ合ったと思うことはないのかと問うと、それはないという。しかし、最初の頃よりも、次にサルがどのような行動を取るかという予測が建てられるようになったと話す。完全にわかるわけではないが、選択肢が何個か思い浮かび、そのうえでの行動を取れるようになったという。代番からメインの担当になってからこうした変化が生じたという。

ニホンザルとの信頼関係については、以下のように回答した。

A 「(信頼関係は) ないと思う…。サルはたまに入ってきて、何かよくわかんない、木の棒振り回してウンコ取って行って、エサをくれる人みたいな…エサをくれる人っていう感じで見ているのかなあとと思いますね。これは多分永遠に変わらないだろうなと思います。もしかしたら 1 対 1 とかだったら、1 頭しか飼育していないとかだったらあるかもしれないですけど、これだけいると、群れの中の方が大事というか。普通じゃないですか、そっちの社会で成り立っているのです。そこに飼育員が介入していくというか…信頼関係があった方がもしかしたらやりやすいのかもしれないですけど、この群れの性質というか性格が、ニホンザルの中で成

り立っていて、別に人にもそんなに友好的でもないし…っていうサルで構成されているので信頼関係はそこまでないかなあっている感じです。あとは（獣舎の）引っ越しの際に、全員捕まえて移動させるので、そういったので、人は何かをやってくるものだっていう記憶の方が強いんじゃないかなと思いますね。」

獣舎移動の際の記憶は飼育員とニホンザルの関係性に様々な影響を及ぼしていた。捕獲の際には、寝室におびき寄せ、扉を閉めて網で捕獲した。その記憶から、現在も寝室に全頭入ることはなく、室内に餌を撒いても外に居続ける個体がいるという。さらに、扉に触れると音に反応し、怖がって出ていってしまうという。毎日寝室に返す動物園もあるため、そこは群れごとの違いだろうと A は述べた。

次に動物と接するうえで心がけていることについて訊くと、A は以下のように回答した。

A「私は、一番は、基本的に担当している動物が野生動物…ペットとしては飼われていない動物なので、基本的には。なのでベタベタしないというか。あまり本当は関わってはいけない動物っていうのは意識して飼育しているっていう感じがすね。猿回しみたいにあれ（信頼関係）が絶対必要…あれがないと飼育できないというような状態でもないし、逆に人が入っていったことによって、結局私はずっとこの群れの中にいられるわけじゃなくて家にも帰るし、ずっとこの飼育しているわけじゃなくてタンチョウとか他の動物を見たりとかっていうのもあるので、基本的には、こう…あんまり近い距離にならないようにっていうふうに思ってやっています。それは動物ごとで、例えばウマ担当になれば、ウマは家畜っていうふうに言われる動物で、野生動物ではない。人がきっちり世話をしていけないと病気になりやすかったりっていう動物ではあるので、そこらへんはその動物の性質というか、そういうのを見ながらっていう感じになるんですけど。」

さらに、このことが来園者への情報発信とも関連するという。

A「お客さんにも伝えられる。あっち（ニホンザル）は野生で確立されているという

か、野生で見る動物で、ウマとかは人が一緒に生きていくためというか、生活していくうえで側にいられるような方法というか改良がされていっているの、飼育のしかたも変わってくるというのが伝えられるのかなあと。あと一番は、こういう野生動物とベタベタしすぎちゃってお客さんが『あの動物も飼えるんじゃない?』とかそういう気持ちになっちゃうと、私の中では良くない情報発信をしてしまったなみたいになるので。この動物園では飼われているけど、そういう動物ではないんだよっていう、そこらへんは見なくていいというか、そういう感じでは受け取ってほしくないっていうのがあるので、そういうふうにならないように、ですね。」

一方でAは、飼育員としては信頼関係を築いたほうがいいと思うと述べた。ハズバンダリートレーニングにも役立つうえ、何かあった時に対応しやすくなるという。ただそれを見て客がどう思うかについては注意し、上手く説明していかなければならないと語った。信頼関係にもステージがあり、ヒトとイヌほどはいかなくてもいいのではないかと述べた。これらの語りから、来園者への「情報発信」と、飼育員にとっての「飼育のしやすさ」、野生動物にとっての「野生性の維持」が拮抗しないよう、距離感の模索や説明を充実させるといった工夫がなされていることが読み取れる。

さらに、群れ飼育について訊くと、動物本来の姿を来園者に見せられるうえ、社会性を作っていける方法であるため、各個体の「動物福祉」⁽⁵⁾的にもいいのではないかといい。ここでは、来園者への「情報発信」と「野生性の維持」や「動物福祉」が重なっていることがわかる。ただ、最初から人工哺育されてきた個体の場合は、その個体にとって何がいいのかは変わってくると思う、とAは加えた。

(2) チンパンジー舎

BとCも、Aと同様に自分は群れに含まれていないと思うと回答した。Bは、かがんだ際や腕を見せた際に、頭や腕を毛づくろいされることもあるという。それでも群れの一員とは言えないのかと問うと、ある程度信頼はしてくれていると思うとしながらも、Aと同様に、自分はチンパンジーだとはみなされていないため、群れの一員とは違うと述べた。また、チンパンジーは特定動物⁽⁵⁾であり、同じ空間に入って飼育することはほとんどない。そのため、もし自分が群れと同じ空間に入ってしまったとしたらパニックに

なるだろうという。C も自分は群れの一員ではなく、群れに影響を及ぼすことはほとんどないとしながらも、チンパンジーは人を良く見ていると思うと述べた。自分の体調が悪かったとき、ゴヒチがそれに気づき、手を差し出してくれたこともあったという。

また、C は 1 年半前から代番者になったが、最初の頃はリョウマから特に侮られており、手を差し出すとガッと掴まれそうになる、つばを吐かれる、糞を投げられるなどといったこともあったという。そのため、少し遠巻きに接していたが、昨年のゴウの引っ越しの少し前あたりから全くしなくなったという。B も 11 年前に担当を開始した当初は、エサを渡す際に激しくつかみ取られる、取る振りをして手を引っかれそうになる、挨拶の際など手を掴んで噛もうとするなどの行動を取られ、試されている感じがしたという。チンパンジーの挨拶としては握手、抱き合う、キスをする、おしりを向けるなどの種類がある。飼育員は檻越しで接するため、手を差し出してきたチンパンジーの指に触れ、挨拶を交わすが、毎朝必ず飼育員とも挨拶を交わすという。B によると、試すような行動が無くなり、手渡しで与えるエサをスムーズに受け取るようになったときに、受け入れられたと感じたという。現在では、麻酔処置などかなりの恐怖心を与えた後もこちらに対して攻撃的な態度は取らず、いつもと変わらない様子でいてくれるという。

B と C で意見が分かれたのは信頼関係を築くべきか、という問いだった。B は、チンパンジーの場合は築くべきだと思うと述べた。理由は「警戒されているとそれだけで負担をかけてしまうため。信頼されている方が何をするにもスムーズにいくため。」だという。さらに以下のように続けた。

B「動物によるというか、社会性の高い動物なんかは、そういうのが大事なのかなっていうのはありますけどね。類人猿なんかは、高度な動物というか、社会性もすごくあるし、他の園とかでも長めに担当することがどちらかというといいと言われていて、コロコロ飼育員が変わると、それこそ頭がいい分、感情が豊かなので、合う合わないみたいなのが出てきてしまうんです。『この人嫌だ』みたいなのが。なので、担当はコロコロ変えない方がいいっていうのは類人猿なんかは言われているんですけど。感情が豊かな分、信頼されている方がいいんじゃないかなっていうのはありますね。」

一方 C は、築くべきではないと考える理由について、以下のように語った。

C「こちらが信じたがゆえに大けがをすることもありますし。襲われない可能性がないわけじゃないし、それに向こうは何を考えているのか分からないですしね。主観じゃないですか、信頼関係を築けているっていうのは。私たちの勝手な主観なので。それは私の中ではないですね。挨拶はもちろん檻越しでは、こちらがけがをしない程度に挨拶はもちろんします。」

また、動物と接するうえで心がけていることについても、C は過度に信頼しすぎないことを心掛けていているという。人間側の安全と、言葉が話せない動物との信頼関係は主観になってしまうという同じ2つの理由に加え、距離を置きながら客観的に見ないと、健康を害しているときや状態が悪い時に気づけないこともあるからだと話した。普段から、他の飼育員や獣医にも見てもらい、コミュニケーションを取りながら飼育するようにしていると述べた。望ましいと思う距離感について C は以下のように述べた。

C「『行動の予測』ができることが重要です。こちらがこのような動きをしたら動物はこういう行動に出る、動物のこんな行動を引き出したい時飼育員はこう動くべきであるという考えをもって仕事することが大切であり、それは『信頼関係』を築く事とは違います。自分と動物の関係性を主観ではなく常に客観的に見られるのが理想です。」

B は、動物を下に見ないことを心掛けていているという。動物たちは常に正しい行動をしてくれているため、思っていたことと違う事が起こっても、自分の配慮が足りなかったと思う、という。

自分たちから動物に働きかけることがあるか、という問いに対しても返答が分かれた。C は、声を出すことがあるという。成獣に対してもあるが、特に今年生まれた赤ちゃんに対してよく「ホッホッホッホ」という声を出すという。この声はチンパンジーが嬉しい時などに出す声だそう。すると、赤ちゃんも同じ声を出して返してくれるという。マツコやヨウは年配の男性職員が好きで、彼らを見かけるとこの声で鳴くという。B は声を出すことや合図をすることはあまりないと述べた。また自分たちで名前は認識して

いるが、ご飯時やハズバンダリートレーニングの時など自分たちの得になる場合を除き、呼んでも特に反応することはないだろうという。

ここで、観察させてもらったハズバンダリートレーニングについて少し触れたい。ハズバンダリートレーニングの際は必ず獣医や他の飼育員と一緒に複数人で行う。頻度について、できるときは毎日行うが、お互いにストレスが溜まらないように頻度を固定化しているわけではないという。獣医も参加する理由について B は、病気やけがのときにだけ呼ぶと、チンパンジーにとって獣医は「嫌な時に来る人」として印象付けられてしまうからだと言った。また、治療目的でもあるため呼んでいるという。加えて C の言うような「客観性の担保」や、特定動物であるチンパンジーと触れ合う際の安全面の担保という意味合いもあるのではないかと推測できる。筆者が観察した際は、B と獣医の 2 人で手分けしてフクとヨウを、次にマツコとリョウマという順で行った。笛の合図とジェスチャーを見て、チンパンジーは指示された身体の部位を出す。まず手を出してもらい、次に足、その際伸びていたら爪も切る。その後胸を出してもらい心電図を取る練習、また母体は母乳が出るか確認する。そして肩を出してもらい、注射を刺す練習をしたあと、お尻を出してもらい、発情や出血の有無をチェックする。最後に口を開けてもらい、口腔内の状態の確認や歯磨きを行った。個体によってこの内容も異なり、かかる時間も違った。今回マツコは便秘気味だったため、浣腸も行っていた。インセンティブとして 1 つの動作が終わるたびに水やエサを与える「正の強化」をベースに行う。

(3) サルの楽園

D も動物たちから挨拶をされることがあると話す。マンドリル同士で行う、お尻を向ける挨拶をしてることがあるという。ただ、彼らのタイミングでしてくるため、チンパンジーのように挨拶と思ってこうした行動をしているとは断言できないという。マンドリル同士の場合はそこからグルーミングに発展することもあるが、D はしかし自分が向けられた際にどのように返したらいいか分からないと話す。少し触ることもあるが、それを彼らがどう思っているかは分からないと語る。



写真2. お尻を向けて挨拶をするケンシロウ（筆者撮影）

また、クモザルのメスは担当者の姿が見えると積極的に鳴いてくるが、それもエサが欲しいというアピールなのか挨拶なのかははっきりしない部分があるという。オスも近づくともうき声を上げるが、メスとは違う鳴き方だという。

D も A～C と同様に、担当動物は人を見分けていると思うと話した。来園者と飼育員を制服で見分けているのではないかという。ただチンパンジーは担当者が休日に私服で行っても反応するが、ここの動物たちはそうではなく、エサをくれる人に反応するという面が強い、と話す。例として、8～9 年ほどサルのレストランを担当していた B をあげた。特に顕著だったのがリスザルで、B が担当を離れエサが貰えないことが分かったと、そこまで寄らなくなったという。D は、自分も担当をやめたら徐々にそのようになっていくだろうと話した。

個体の識別はできるのかという問いには、基本的に毎日見ていれば誰でも見分けはつくと思うと話した。身体的特徴に加え、群れ内での行動で見分けているという。しかし、人間の主観だけだと間違えることもあるため、チップも活用しているという。各動物の名前については、そこまで呼ぶ機会も多くないため、動物の側ではあまり認識していないという。

また、動物と接するうえで心がけていることについては、A や C と同様に程よい距離感を保つこととした。それがあまり名前を呼ばないこととも関係しているという。ま

た、A と同様に来園者からペットのような見え方をされてしまうのが怖いと語った。日本はペット大国であり、エキゾチックペットの問題にも絡んでいるため、間違った情報が結果的に密輸の横行などに繋がってしまう恐れがあるという。

一方で、信頼関係に関しては、A や B と同様に築くべきだと思うと述べ、「動物たちが精神的にも肉体的にも健康に過ごすことにつながると考えるから」とその理由について回答した。

サルのレストランでのハズバンダリートレーニングについて D は、1 種類成功させてから次の種類に行くという方法で行っており、馴致の期間も必要なため、かなりの時間を要するという。D の場合はフサオマキザルでケージに入る練習と体重測定の練習をしていたが、子どもが生まれてから警戒心が強くなり、以前のようにスムーズにいかなくなったという。このように、上手くいっていたことが一瞬にしてうまくいなくなることもある、と D は話す。

ここでもハズバンダリートレーニングを観察させてもらった。扉を開ける際に声掛けをしていたが、これはコミュニケーションというよりは、いきなり大きい音を出して驚かせないために、存在と場所を認識してもらうために行っているという。ただ D は、「ごめんね」などの言葉をよく発すると、悪いことと関連付けて言葉を認識してしまう可能性があるため、不用意に話さない方がいいのかもしれないとも加えた。

関連して、鳴き声など D から発することがあるのか、と訊いた際の回答を紹介する。

D 「ない…ですね。お客さんに説明するときに、こういうふうにキャッキャッキャッキャ鳴きますとか、ちょっと遠吠えしますみたいなのはありますけど、あんまりこっちから彼らに向かって鳴き声をするってことはないですね。あとなんかこう、一回動物モノマネが得意な方というか、それをお仕事にされている方が、いろんな動物園を回って声を録音とかして。でも基本的には、動物にどういう影響が出るか分からないから、その人は声マネをそこですることはしないって言って、たしかにそうだなって。」

筆者「なんか意味をもっているかもしれないからってことですか。」

D 「しれない…あとはそれがよく影響するのか悪く影響するのかも分からないから、その人はそういうふうには、声出さないってしてるんですけど、でもお客さんとかはやっぱりそういう、同じような声じゃなくても例えば『ウッキッキ』と

か、自分のイメージするサルの鳴き声を動物に対して発することは…お客さんはあつたりしますね。ただ飼育員ではあんまり鳴き声をマネして動物たちに接している人はいないって感じですね。あとはお客さんがそういうふうに声出していても彼らはあんまり反応していないイメージですね。」

筆者「特にコミュニケーションを取るってことはほとんどないって感じですか。」

D 「鳴き声では基本的にない…まあ便宜上ちょっと名前を読んだりとか、ちょっと状態を見たい時に、人だと呼ばば振り返ってくれるんで、その条件付け…こっち（飼育員の側）が条件付け（をされている状態）なんですけど。例えば『シロ』とか『シッポシッポ』って呼んだりすることはあるんですけど、それでも振り向いてくれないことは多々あるって感じですね。確かにそうですね、そういわれるとあんまり積極的にコミュニケーションは取っていないのかもしれないですね。改めて言われると。馴れてほしいとは思いつつ、積極的になれてほしいなっていうような行動はとっていないかもしれないです。」

(4) キリン・シマウマ舎

E、F はともに、飼育動物から給餌者として、また害のない、よく周囲にいる存在として認識されているという。動物からの働きかけについて訊いた際も、エサの催促や放飼・収容の催促に限るという回答であった。F はさらに、基本的には動物と人との信頼関係は築くことができないと思うと述べた。ただ、動物園動物においては、お互いがある程度「認知」することが必要だという。その理由としては、A、B、D が「信頼関係」を築くべきとした際の理由として挙げた、ハズバンダリートレーニングのしやすさや動物のストレス低減に加え、「認知」がない場合、驚いて事故に繋がってしまうこともあると語った。また、意思疎通できているという感覚はないとしながら、A と同様に、こうしたらこう動く、この時間はこんな気分だろう、という感覚的な予想は立てていると述べた。

E も、動物には関係がないことであるため、信頼関係は築かなくていいと述べた。「担当者の顔・格好・音・臭いに慣れること」が重要だという。E はさらに、動物種によって望ましい距離感は異なるとし、直接飼育・間接飼育・準間接飼育という異なる形態の飼育方法を挙げ、お互いに安全な距離感を考え続けるべきであるとした。

5-3. 来園者と動物との関わり

ここでは、飼育員に聞いた、来園者と動物との関わりについて記述する。来園者自らが語る来園者と動物の関わりについては6章で扱う。

(1) ニホンザル舎

A はニホンザルの場合、来園者の存在はあまり動物に影響していないと思うという。以前の獣舎だと近くにサルのエサを扱う自動販売機があり、恐らく影響があったはずだが、現在の獣舎に移動してからはほとんどないのではないかという。1 回目のインタビュー調査をした当時は緊急事態宣言下で休園中であったため、営業を再開した後に休園時との変化について再び聞いてみた。しかし、休園中との変化はほとんど見られないとのことだった。2021 年 1 月にも一度休園し、再開したことがあったが、引っ越し直後だったために群れ自体が混乱しており、来園者の影響ではなかったという。

動物から働きかけることがあるかという質問に対しても、ほとんどないという。これも以前の獣舎の場合、強い個体がエサの落ちるであろう場所に集まる、エサを要求するといった様子が見られたという。

(2) チンパンジー舎

B は逆に、来園者の存在が担当動物に影響していると思う、と話す。リョウマなど来園者に対してディスプレイ⁽⁶⁾をする個体もいるため、来園者の存在を意識しているのだろうという。リョウマは思春期にあたり、自我が芽生え始めたため、自分の強さを見せつけたいのだと B は話す。しかし群れの中でディスプレイをするとゴヒチやユウに怒られるため、来園者にすることがあるのだという。C も、気に食わない来園者にはカラーボールを投げる、木の棒を投げるなどの行動をする個体がいると話した。休園中は来園者がいなかったため、たまに業者の人にするこももあったが、頻度は減ったという。休園中に筆者が訪問した際も、ガラス越しに飛び蹴りされた。C によると、飼育員の隣に知らない人がいたうえに、約 2 か月ぶりに飼育員以外の人を見たためだという。

また、B は動物から来園者に働きかけることもあるという。来園者にエサをくれるように催促する行動や、常連客と遊ぶこともあると話す。催促の行動としては、上からものを投げる振りなどをする人がいると、立ち上がって手を叩いてアピールするという。また、運動場内には「ワクワクドーム」という、来園者が下からチンパンジーの森を見

上げられる構造になっているガラス張りのドームがある。常連の子どもが来たときはこのドームや半地下のガラス張りの展示場に誘い、遊んでいたという。今年までいたゴウがリョウマと一緒によく常連の子どもと遊んでいたそうだが、ゴウがいなくなってからリョウマはあまり遊ばなくなったという。子どもはよく遊ぶが、大人になると遊ぶよりも毛づくろいをしてコミュニケーションを取る方が多いという。

(3) サルの楽園

サルの楽園の動物たちは基本的に来園者のことは気にしていないという。遠足などでたくさんの来園者が来た場合や、子どもが騒いでいる場合も無反応だという。ただ、リスザルについてはその限りではないとのことだった。ウォークスルータイプであるため、客が食べ物をもっていないか気にするような行動や、大勢の来園者が来たときは通路に出ずに遠巻きに伺うといった行動が見られる場合があるという。本来エサをあげることはできないが、袋のようなものを持っていると反応して近づいたり登ろうとしたりすることもあるという。関連した動物からの働きかけについても、リスザルの場合は、エサが貰えると思うと手を伸ばすといった行動が見られるという。

また、幼体は人間の子どものに対してちょっかいを出すといった行動をするというが、この行動は成長とともに消失するそうだ。その理由について訊くと D は、3 歳くらいまでは兄弟同士など群れの仲間と取っ組み合いをして遊ぶが、成長とともに消失するため、人間の子どものちょっかいをかける行動もその延長なのではないか、と推測した。先述した現在 2 歳のゲンキも、人間の子どもの飛びかかるといったいたずらをするため、客が通る時間帯には檻の中に入れている。爪によって子どもがけがをしてしまう危険性があるからだ。また、このような展示方法ではあるが、非接触で行いたいと思っている、と D は述べた。近くで見てほしいというコンセプトであって、ふれあい目的ではないという。非接触で行いたいという理由について、D は「コロナもやっぱりあるので」と加えた。筆者が、園内の「ふれあい広場」での動物とのふれあいもコロナウイルスの影響で中止されていたことをあげ、動物への感染を危惧しているということか、と問うと、D は以下のように返答した。

D「そうですね、基本的には人からの感染を防ぐため。なかなか動物だとどういう症状が出るか、まだはっきり分かっていなかったり、処置も難しかったり。人間で

も確立されていないものではあるので、それを防ぐためについていう意味で。これから、もしかしたらどんどん厳しくなっていくかもしれないですね。コロナに限らず、もうちょっと人獣共通感染症について厳しく取り扱った方がいいんじゃないかってなれば、檻の距離をもうちょっと広くとるとか、完全にガラスにするとか。どんどん展示の近さっていうのはなくなっていくかもしれないですね。」

また、現在の来園者は昔に比べて動物への理解もあり、品もあると D は話す。昭和の時代はエサやたばこを投げ込む来園者もいたという。動物を下に見るような意識が徐々になくなってきているため、今後は良くなる一方なのではないかと話してくれた。

(4) キリン・シマウマ舎

キリン舎、シマウマ舎ともに来園者の影響は見られないとの回答だった。また、動物から来園者に働きかけることも特にないという。ただ、キリンの場合は見たことがない道具を使用する、物を投げる、見たことのない工事車両や音がする、といった状況の場合に逃避行動をするという。

5-4. 飼育員と来園者との関わり

ここでは、来園者との接点や接する際に心掛けている点について、飼育員目線での語りを整理する。

A は現在担当しているニホンザル舎と、以前代番者として担当していたキリン舎、またポニーのガイドをしていた際の例をあげた。ニホンザル舎ではそこまで接点が多くないという。ただ枝葉などが手に入り、展示場に投げ入れる際は、「今、この葉っぱが手に入ったのであげます」、「ニホンザルは葉っぱも食べます。バナナは食べません」などといった説明を行うという。また、キリン舎ではもぐもぐタイムがあり、その際にはキリンについての話をしながら、来園者にエサをあげてもらっていたという。さらに、ポニーのガイドを行っていた際の話を印象に残っていることとしてあげた。頻繁にガイドを聞きに来てくれ、常連になってくれた子どもがいたとことが印象深いという。その子どもとはポニー以外の話もよくしていたそうだ。

接する際に心がけていることとして A は、間違った情報を言わないように気をつけていると話した。

来園者と接するうえで心がけていることとしてBは、「動物の話をする時は敬意を払うようにする。マイナスな事ではなく、優れた部分などプラスの面を話すようにし、下に見ているような発言はしない」と述べた。これは、動物と接する際に心がけていることについて訊いた際の回答と重なる部分があり、Bが飼育員として大切にしていることであると窺い知れる。

また、来園者との関わりで印象に残っていることについて B は以下のように述べた。

筆者「来園者との関わりで印象に残っていることはありますか。さっきも常連さんとお話しされていましたけど。」

B 「さっきの方は本当に好きで、だからこそ娘さんと（ゴウやリョウマが）すごく仲良くしていたとかはあるんですけど。常連さんだと、私たちは仕事の時ゆっくり動物を見られることってそんなになくって、作業…午前中だと掃除しなきゃいけなかったり、結構バタバタしているので。もちろん動物を見る時間は大切なんですけど、長くは取れないんですよね。5分見て、作業30分やって、また5分見て作業30分やってみたい。なかなかこう、じっくりは見ている時間が…すごく観察って大事なんですけど、なかなかとれなかったりする中で、常連さんとかだと、本当にずーっと見ていたりするので、私たちが知らないようなことを教えてくれたりもするんですね。『こんなことしていましたよ』みたいな。あとはやっぱり、私の前で見せる姿と、私が見ていないときの姿って多分違うんですよね。ほら、おうちでも家族に見せる姿と、自分（ひとりで）の時だけの姿ちょっと違ったりすると思うんですけど、そういう感じで、私には見せない姿も、常連さんとかはたまたま見ていたりして、『こんなことしていましたよ』みたいなのは、『ああ、そうなんだ』みたいな（気づきがある）。すごくありがたいなって思いますね。

Cも常連の来園者について触れ、顔を覚えてもらっていると話した。そのため、園内で話しかけられることや、自分から声をかけることもあるという。心がけていることとして、以下のように話した。

C 「まず動物園内で会っているときはそうだし、イベントに参加しているときにお

話しすることもあるんですけど、その方が何を見ていたのか…動物だったらね。あとはイベントに参加しているっていうことは何かを楽しみに来ているわけだから、何かをやりに来ているわけだから、その方が楽しんで、何かを一つ学んで帰っていただけるような声かけはしていますね。」

筆者「動物に関する知識をお話ししたりとか（するのか）。」

C 「それもありますし、ただ単に動物も何も関係なく雑談だけっていうこともありますけど、それでも全然いいと思っていて、そういう雑談ができるような飼育員さんがいる動物園っていうのはその方にとってはすごく楽しい場所だと思うので。そういう場所を作ってあげたいなっていうような気持ちは持っています。」

かみね動物園でのイベントは、動物の生態や飼育について知識を深めるイベントや、飼育員や獣医の仕事にフィーチャーしたもの、季節イベントなどを行っている。内容の軽重は様々であり、対象者もそれによって異なる。その内容を考え、実施するのも飼育員の仕事の1つである。

来園者とのコミュニケーションを大切に、その内容は動物の話に限らないという点はAと共通している。また、印象的だったことについて、Cは以下のように話した。

C 「ライオンを担当していた8年前に小学校5年生だった少年が最近会いに来てくれました。出会った当時はライオンが大好きで一緒にガイドをお客様の前でやり、自由研究に協力したりして交流していたのですが年齢が上がるにつれてだんだん動物園に来られなくなり会う頻度も少なくなりました。約2年ぶりの再会で、『生き物が好きで大学で学芸員の資格を取って動物に関わる仕事がしたい』と言っていたのでとても嬉しくなりました。」

D ももぐもぐタイムやイベント、園内移動の際に来園者と接する機会があったとした。心がけていることとしては、「嫌な気持ちにならないように、せかせか対応しないように」気をつけているという。

また、印象的だったことについて訊くと、以下のように回答した。

D 「もぐもぐタイムとかでお客さんと話す機会があったり、あとはイベントで（中略）お客さんの声を直に聞けたりとか。あとは自分が小さい頃だったら全然知らないようなサルの名前とかも、小さい子が喋れてたりとか。動物園ってこういうところなんだねっていうイメージが変わっていく瞬間を見れると面白いなっていうのはありますね。なかなかやっぱこう、楽しみでっていうか、レクリエーションでっていうか、そういう意味合いで来ている人が大多数ではあるので。そこにどれだけ面白いとかそれ以上の、伝えたい部分をそっと入れられるかがなかなか難しいけど、伝わった時には嬉しいなと思います。」

筆者「レクリエーション要素をなくしたいとかではなくて（残しつつ情報発信をしたいということか）。」

D 「あ、そうですね。もちろん楽しんでもらいたいし、楽しみからどんどん発展していくことってあると思うので、入り口としてはすごくいいと思うんですよ。たぶんその部分がないと、じゃあ行こうってなかなかならない、日本だと特にならないとは思うので。そこからまた、プラス α で何か付け足していくっていうのはこっちができればいいなと思います。」

E も来園者との関わりについて、挨拶や説明だけでなく、注意も含め声掛けを大切にしているという。また、来園者に合わせて対応していると話す。

F も来園者の年齢に合わせた言葉選びを心掛けているとした。また、動物に興味のある人や、関連した質問をしてきた来園者には動物のことを面白いと思ってもらえるような豆知識や経験などを話すようにしているという。さらに、印象に残っていることとして、イベントを挙げ、子どもたちが楽しそうにしていたり、その中で動物の面白さを発見したりしている姿は印象に残ると述べた。

5-5. 飼育員の動物観・自然観・動物園観

A、B、C は動物に関わる仕事がしたいという理由から、飼育員の道に進んだという。D はそれに加え、人と動物を繋ぐ場であることを挙げた。E も A～C と同様の内容に、健康という観点から屋外作業であること、やりがいという観点から接客であることを加えた。F は野生動物と関わるができる仕事は限られている、という点を指摘した。ここでは、飼育員がどのように担当動物を捉えているか、また動物園動物に限らず、動

物や自然をどのような観点で見ているのか、動物園や自らの仕事についてどのように考えているのかについて見ていきたい。

(1) 動物観

飼育員が持つ動物観を知るために、第5章第3節でまとめた社会性についてもう一歩踏み込んだ質問をしてみた。

筆者「これは抽象的な質問なんですけど、ニホンザルには心があると思いますか。」

A 「感情はあると思います。それがイコール心なのかは分かりませんけど。」

筆者「感情はどの程度（あると思うか）。」

A 「やっぱり怒ることもあるし、こういうふうに（指さして）毛づくろいは仲のいい個体とか仲良くしたい個体とかにやるので、この個体と仲良くしておいたらこの群れの中で生きやすいかなあって考えたりとか。まあ、もっとその個体と仲良くなりたいとか、近い関係…うちはそこらへんはちょっとデータとして残してないので何とも言えないですけど、例えば親子だったりとかで毛づくろいしたりとかしているの。あとは闘争が起きて一頭がギャーギャーやられていても、その個体の仲の良い個体に強い奴がいたら助けに来たりとかもしているの。そういったことは考えながら生きているんだろうなあっていう。人間の中でもこいつはいいけどこいつは嫌だとか。あとはだいたい捕まえたりとか危ない…タワーとか危ないところに行く時はヘルメットかぶったりしているので、ヘルメットかぶっているときはザワザワするというか…みんな安全そうなところに逃げたりするので。心ってなんだろうみたいな感じになっちゃうんですけど、あるのかな…あるとは私は思います。色々考えて生きているとは思いますが。」

B も感情についてあると思うと回答し、「好きな食べ物をもらって嬉しい、他の個体と遊んで楽しい、ひとり残されて不安、見慣れないものがあって怖い、ルールに従っていない行動をされて腹が立つ」などを挙げた。

「知性や理性、感性」の有無について、B、C、F は知性や理性はあると思うとした。

- B 「チンパンジーは母親や他の個体が行っている行動から色々学び、真似をして覚え、試行錯誤をしていくため。ただこれは知性ですか？群れのルールを守っているため理性はあると思います。感性はちょっと分かりません。」
- C 「行動が多様で、手先が器用なため、あると思います。コミュニケーションのしかたも多様で声だけでなく、手や口を様々に使ってコミュニケーションを取っています。」
- F 「廣野さんの考える理性・知性・感性とわたしの考えるそれが同じかどうか分かりませんが、そのうえでの返答、また、完全主観的な感覚になってしましますが、群れで暮らす社会性のある動物なので、少なからずあるのかな〜と。(中略)ただ全てのシマウマにあるというよりは環境に左右され、個体差があるように感じます。」

D は、知性はあるような気もするが、理性と感性はあるか分からないとし、先述したマンドリルのリエルがケンシロウに遠慮している例などを挙げ、個体の行動を予測して動いているときに知性を感じる、という。一方で E は、本能で生きる動物たちなので、理性や感性を意識したことがない、と回答した。

人間とそれ以外の動物との違いについて、C、E、F は言葉を喋ることや服を着ること、生活などを挙げた。また、食べること、住むこと、子育てなどそれ以外ではすべて共通していると感じている、と述べた。

(2) 擬人化について

次に動物の擬人化について、どのような考えを持っているか訊いたところ、共通して、誤った情報発信に繋がってしまうような擬人化は問題だと指摘した。ただ、絵本など小さい子どもに向けたものや小説であれば問題ないという意見も多数聞かれた。理由として、F は動物を知ってもらい、好きになってもらうという点ではいいと述べた。また、A によると特にサルの仲間は人間に投影されやすく、表情も分かりやすいといい、来園者の会話でも「〇〇ちゃんに似ている」といったものが良く聞かれるという。それを踏まえて A は、一般の人が擬人化をすることは否定しないが、動物園はそれで終わっては

いけないと思う、という。

A「そこは擬人化とかじゃなくて、この動物はこういう生きもの、この行動はこういう時にする動物っていう発信をしないとイケないし、動物園は動物を見て癒される所でもありますけど、そういったことが、まあこういう動物…街中でもニホンザルって日本に住んでいるけどなかなか見られないし、逆に街中で会ったら全然しっかり見られない…怖いみたいな、近づかない方がいいとかってなるので。こういう動物園で観察できるいい機会というか、そういう場所なので。そういったことは擬人化とかではなく、しっかり伝えた方がいいなっていうふうに思います。
(中略) プラスアルファの情報があつた方が、こういう施設で動物を飼っている意味があるのかなっていうふうに思います。」

C も、飼育員としては動物の生態について本当のことを伝えたいという思いがある、と話した。

関連して、動物の権利運動についての話を取り上げたい。

A「動物福祉として、動物が快適に暮らせるような環境は保たれるべきだとは思ひ、エサも与えられなくてやせ細ってっていうようなのは絶対にダメだと思ひ。でも、権利ってなると、その動物は果たしてその権利を使いたいのかっていうのか欲しいのかってなるし、それこそ擬人化みたいな感じなのかなってなるし、(中略) この動物はこう思っているからこうすべきだみたいなのは押し付けというか、本当にその動物がそう思っているのかは分からないのであんまり、すべきじゃないのかな。それが例えば本当に科学的なデータ、この動物はこういうふうにした方がストレス値が下がるっていうデータがあるからこうした方がいいっていうんだったら分かるんですけど、この動物はこういう権利がってなると、それはちょっと違うのかなっていうふうに思ひます。それは多分そういう科学的なデータがあるかないか、その権利に。それを権利というのは、まあその人にそういう感情っていうか、まあその動物に人間の社会を当てはめちゃっているのかなっていうのは思ひますね。この群れの中では権利とかそういうのもなく、嫌だったら闘争っていうかケンカするし、要するに力で勝ち取っていくっていう感じの群

れなので。」

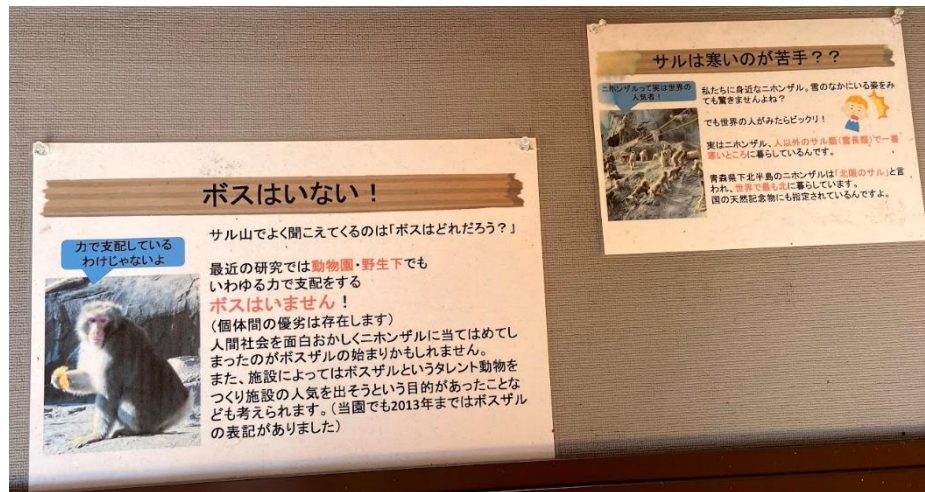
動物の権利というのは動物園に付きまとう問題であるが、ここでは科学的なデータの有無によって識別するという視点が提示された。

(3) 動物園観

動物園の役割について訊くと、以下のように回答した。

A「あの、4つの役割があるじゃないですか、動物園って。レクリエーションと教育と研究とか保全っていう。私はここ…動物園で本当に働きたいと思ったのも、環境エンリッチメントっていう言葉があるんですけど、動物が本当に良い暮らしをするための工夫。やっぱりそういうことをすることによって、動物がこんな行動をするんだとかっていうのが、お客さんも見れるし、動物にとってもプラスになると思うので、そういうのがしたいって思って入ったので教育…まあその中でいうと教育なんですけど、教育っていうよりかは伝える。動物園は来てもらった人とか、今だと SNS も発達しているので、何かしらを伝えていくことが大事なのかなっていうふうに思っています。それが動物のことであったりだとか、動物に関わる環境の事だったりとか、そういったことを知って、そういう考えもあるんだみたいな、新しい発見を来てくれた人に提供するような役割を持てればいいのかなっていうふうに思っています。」

そのためにしていることとして、掲示物や先述したようなイベントがあるという。かみね動物園でのイベントは、「何か目的があって、それを達成したいからこういうイベントがしたい」という目的起点で企画するようにしているという。また、来園者が動物について話しているときに、近づいて知識を伝えるということも行っているという。



動物の生態について伝える掲示物（筆者撮影）

B は、動物園の役割については、すべてが絡み合っているため 1 つを選ぶのは難しい、と前置きしたうえで、あえて言うならば種の保存であるとした。理由としては、動物園である以上は動物がいないと成り立たないからだと言った。また D は、動物に興味を持つ場であることとした。理由として、「動物園で暮らす動物たちは絶滅の危機に瀕しているのも少なくない。動物園は楽しむ場でもあるが、彼らが本来暮らしている環境やそこに暮らす仲間たちを守ることにつながるよう機能すべきと考える。動物園に足を運び、動物に興味をもつことで、自然に対して自分たちが出来る事を探し、行動するきっかけを作る場であってほしい。」と回答した。C、E、F は「教育」「研究」「保全」「レクリエーション」の 4 つ全てが同じくらい大切だと考えている、と言った。C は「イベントやワークショップで楽しみながら環境保全について学ぶ、動物福祉を考慮した展示を行うことで飼育下での行動研究に繋がる」などといった例を挙げ、全てが互いに関わり合っていることを指摘した。

さらに、飼育員の役割についても、それと関連した内容が聞かれた。

A 「この動物と、本当に来園者の人を繋ぐような役割ができればいいのかなと。それが例えばその動物を知ってもらう一つの装置というか。ガイドとかして知ってもらうとか。なので、そうですね。動物とお客さんを繋ぐような役割ができればいいなっていうふうに私は思っています。それが一番…動物の飼育とかそ

ういうのを抜かすとそういう役割かなって感じです。」

筆者「先ほどの環境エンリッチメントの話に繋がってくるって感じですかね。」

A 「そうですね、そういうのも全く知らない人は見ても分からなかったりするじゃないですか。『なんでこれ（展示場内にあるタワーを指さし）こんなところにあるんだろう』とかっていうのも説明したりとか、掲示物作ったりだとか。まあなぜそれを置いているのか、野生だとこういう行動をするんだけど、動物園ではなかなかそれは難しいから、それを疑似体験できるようなこういうものを作ってみましたっていうことも、動物とお客さんを繋ぐじゃないですけど、そういうところに繋がっていくのかなと思います。」

ニホンザル舎にあるタワーは、獣舎移転の際に新たに作ったものである。ニホンザルは野生下であれば木に登って空間を三次元的に使うため、それに近い状態を作るという意図で建設したそう。また、獣舎の狭さもあり、高さを使って様々な個体が居場所を確保できるようにという狙いもあるそう。こうした獣舎内の構造の企画にも飼育員は携わっているという。また、建設後もタワー内に木の枝を設置するなど改良を行っている。

B は、飼育員の役割について、動物をしっかり観察することと回答した。言葉で伝えられない動物の状態をしっかり把握することが大切だという。C は、「どれだけ動物本来の行動や生態を引き出せるかが重要かと思います。それが来園者に学びをもたらすのに繋がるので。」と回答した。D は、「動物が健康に楽しく暮らせるよう努め、生き生きした姿を来園者に見てもらうこと」とした。理由として、「動物園は動物と来園者がいて成り立つ場であるため」だという。E は、上下関係ではなく平等な関係を築くこと、死亡や事故の確率を低くすること、来園者に楽しみながら動物のことを知ってもらうことの3点を挙げた。F は対動物、対来園者によって重要なことは変わってくるため、1つに絞ることはできないとした。

動物園や飼育員の役割について訊いた際に多く挙げられたのが、飼育動物の適切な管理という点と、来園者に学びをもたらすという点だった。

一方で、同章2節では動物にとっての快適な住環境と両立していた「展示効果」が、「動物福祉」と拮抗することもあるという。

D 「それこそここ（リスザルの島）は展示効果を上げようとして、やっぱり近いから、間近で見られるし、展示効果としてはかなり高い…ただこういう展示を…まあその囲われていないので自由に見えるし、展示効果としては外からもすごい見やすいし良いんですけど、この池がなければリスザルは、陸地にすれば使えた、ケージにして。あとまあ人が通らなければあの子（ゲンキ）も問題なく外に出れる…っていうことを考えると、そこは拮抗するっていう。なかなかまあ、上手くいくこともあれば、群れの状態によっては、そこが両方が最大限良くすることができないっていうこともありますね。まさにリスザルは今その状態です。展示効果あげたくて、展示は広くなるけど、見えない寝室は狭くなる…その分割られちゃう。それもこういうことなのかもしれないですね、なかなかお金も絡んできますけど。でも、一日の半分部屋の中で過ごしているので本当は部屋も充実させてあげなきゃいけないけど。」

筆者「今そういう状況っていうこと（なのか）。」

D 「まさにそうですね。超狭い。寝室が…床が2メートル×2メートルくらいしかない。だから群れもこれ以上大きくすることができなくて、ペア飼い、多くて親子…までしか飼うことができない。たぶん他の動物園でも同じような感じだと思いますね。」

一方で、動物園の今後の在り方については肯定的な意見が多く聞かれた。Bは、「以前よりも動物への配慮がなされるようになってきているので、より良い環境が提供されていくと思います。その中でレジャーのイメージが強い動物園の印象が種の保存や保全、研究、教育の場であると考えてもらえるようになってほしいです」と述べた。さらに、特に種の保存という点に関して、「一般的に言われる珍しい、珍しくないに関係なく、その動物の能力や魅力を最大限引き出せるような展示をし、言葉だけではない域外保全の場になってほしい」という。Cも同様に、「動物福祉についての市民の目がとても厳しくなっています。SNSで誰でも発信して取り上げられる時代でもあるので今後その面では飼育の質は上がっていくと思います」と述べた。Dも来園者の質が上がってきていることを示し、動物福祉や環境について考える人も増えたため、外側からそのような意見が増えればおのずと施設も変わっていくと示唆した。

また、仕事のやりがいについて訊いたところ、動物の健康状態が良く、生き生きしているとき、来園者が楽しみながら動物に興味を持っているときという2つが共通してあった。また、それらは関連しているということが読み取れる。

A 「来園者が展示やガイド・イベントによって動物について何らかの情報を得た時。それに対し、『へーすごいね』や『こういうことなんだって』など来園者同士で話している時。また、動物の健康状態が良いとき、エンリッチメントなどで野生下の行動を引き出せたとき等々。」

B 「難しいな。でもやっぱりこう、今日もこう、お客さんと話していたんですけど、お客さんが見て、ここ面白いですよ、ああですよ、こうですよって言って、なんか自分がこう、チンパンジーができるだけ生き生きとしたというか、楽しそうに暮らしているところを見せられたらいいなと思っているので、それに対してお客さんがあれ、ああでしたね、こうでしたねっていうふうな反応をしてくれている時は、ああ良かったなっていうふうに思いますね。」

筆者「それは、お客さんに対してもだし、チンパンジーに対しても、いいことができているっていうような？」

B 「そうですね。楽しいところを、お客さんもそれを共有してくれたっていうのは、どっちにとってもいいことなのかなっていうふうに思います。」

C 「来園者とお話していて動物のことに興味を持ってくれたり面白いと感じてくれている発言があればガッツポーズしちゃうくらい嬉しいです。また、こちらの行ったことに対して狙い通りに動物が行動を見せてくれたら（採食行動やトレーニングなど）とても嬉しくなります。」

D 「お客さんが動物に対して興味を持ってくれたとき、動物が健康で生き生きと過ごしていること」

E 「来園者との会話。動物の健康。」

F 「イベント後に子供たちが動物について学んだことや発見したことを嬉しそうに親や周りに離している時。」

ここからは、「動物の良好な健康状態」と「来園者の楽しみ」は前提にあり、さらに「野生下での行動を引き出し生き生きとしている」、「来園者が学びを得る」という段階にステップアップすることを指向しているということがわかる。

5-6. 小括

本章では飼育員の語りから動物園における社会関係を描き出すことを試みた。動物同士の関係については、動物園という場に特有の関係を見ることができた。ニホンザルの獣舎移転による群れ内の社会関係の変化や、他の群れに馴染めなかった個体が集まったような群れが寛容な元・現アルファオスの 2 頭と、ゆるいルールによって結び付いているさま、野生下では近づかない動物種同士の関わりなどがそうであった。

飼育員と動物の関係について、共通していたのは飼育動物が飼育員や来園者などの「人を見分けている」という語りだった。このことから、人間が一方的に動物を見る場とされる傾向がある動物園だが、人間もまた動物に見られているという「双方向性」が存在することがわかる。また、認識し合うこと、挨拶をすること、遊ぶことなど、共通の体験をすることを通して、一方的な関係を越え、「ともに」生きる関係が築かれていた。来園者と動物の関係についても、上記のような「双方向性」が見られ、互いに認識し合い、もぐもぐタイムや遊びなど経験を共有する様子が描き出された。来園者と飼育員の関係についても同様のことがいえる。互いに認識し合い、話をするという経験の共有があった。

また、動物理解の方法として、飼育員が「科学的ではないが」と前置きしたうえで述べた内容や、「不思議」、「こっちの気持ち」だと形容したことが度々あった。それに対して、「科学的なデータ」を根拠として求める態度や「客観的」であることを重視する語り、動物の「現金さ」や「本能」など、生物としての側面で説明する語りも随所に見られた。ここからは、飼育員が経験的理解と客観的理解の両方を行き来しながら動物を理解していることが窺える。

飼育員は来園者に適切な情報を伝え、飼育動物の本来の行動を引き出すことによって

二者を「つなげ」ていた。これは市民と野生動物を繋げることに貢献しているともいえる。このことは動物園の役割として、また存在意義としても重要な点であった。来園者に向けた展示効果と、動物にとっての動物福祉、飼育員にとっての飼育のしやすさが拮抗する場面もあるが、適切な距離感やエンリッチメントなどの工夫をすることによって、飼育員は二者への良い影響を最大化することを模索していた。

また、来園者が飼育員と動物を「つなぐ」役割を果たすこともあるということが分かる。このことは、来園者から動物の状態を把握するための情報を提供されるという事例や、動物福祉に対する来園者の意識の高まりが外側から動物園を変えていくとする飼育員の語りから抽出できる。そして、飼育員と来園者の関係においても、動物の話をする関係から、それにとどまらない様々な話ができる関係に進展するという事例が見られ、動物が二者を「つなぐ」役割を果たしていたことが窺える。また、これらのつなぐ役割は、他の2者を「変容させる」働きでもあると読み取れる。

動物観については、「信頼関係」や「理性・知性・感性」、「心」などの用語を定義せずに質問してしまったことから、安易に回答を比較できなくなった。しかし、各々の考える定義について訊くことができたとともに、どのワードが回答者のアンテナに引っかかり、回答に結びつくかというポイントも見ることができた。ここからは、動物に認識してもらい、存在に馴れてもらうことの重要性を共通して聞くことができた。しかし両義的でもあり、飼育管理をするうえではあえて距離を取ることの重要性も意識されていた。これは野生下の動物を飼育するということの難しさ、また両義性に由来するものと窺える。

また、この動物との距離を取る、あるいは働きかけないという点が回答において頻繁に見られ、強調されたことは特筆したい。本稿は動物園という場において、3者が働きかけ合っているという前提のもと出発したが、「働きかけない」こともまた、社会関係を説明するための重要な鍵となるだろう。

さらに、動物園には当初想定していた「飼育員、来園者、動物」という3者以外の行為主体が存在することをインタビューや観察を通してみることもできた。動物園内のメインの行為主体として、獣医も重要な役割をはたしていたうえ、樹木を管理する職員、共同研究をする学生や研究者などが存在していた。特にこの研究は動物園の役割の1つでもあるため、本稿においては研究者も動物園の行為主体として調査対象にすべきであった。

以上から、本章を通して浮かび上がってきたキーワードとして、「経験の共有」、「双方向性」、「つなぎ、変容させる」、「働きかけない」、「経験的理解と客観的理解の往来」が挙げられる。これらをもとに、第7章で結論・考察を試みる。

第 6 章 来園者の語りと観察結果

本章では、来園者 10 組におこなったインタビューから動物と来園者の関わりについてみていきたい。それぞれの属性や来園頻度については、表 2 を参照されたい。

6-1. 来園者と動物の関わり

本節では、来園者と動物の関わりに関する特徴的な語りを抽出する。特に見たい動物については考えずに来園した、もしくは全部だと回答した来園者もいたが、特定の動物を目当てに来園した人もいた。来園者①は、孫がゾウやキリンが好きであるため、それらを見に来たという。⑦も子どもが見たい動物であるため、ゾウだと回答した。③と⑤はライオンを挙げ、③は選んだ理由について可愛いからだと話した。⑥もキリンを挙げ、以前のもぐもぐタイムでエサやりをしたことがあったためだと回答した。⑨はヒグマ、クモザル、トラ、ライオン、サイ、カバ、シマウマ、チンパンジーとたくさんの動物種を挙げた。理由について、「もともとヒグマは動物のなかでも特に好き。声で（2 頭のどちらであるか）聞き分けることができる。チンパンジーも見分けがつく。あと、ゴウは寄ってくる（ことがあった）。」と述べた。⑩もチンパンジーを挙げた。以前はゴウがお気に入りだったが、ゴウがいなくなってしまった現在は、表情が豊かなイチゴが面白いと話した。

来園前に見たいと思っていた動物ではなくても、来園後に印象に残っている動物として名前が挙がるものもあった。⑦は実際にその日子どもが時間をかけて見ていたのはカワウソとヤマアラシだという。見たい動物は全部だ、と語っていた⑧の 15 歳の女性は、「チンパンジーがドームで手を合わせてくれた。自分が首を振ったらそのチンパンジーも首を振ってくれた」と話す。25 歳の女性のほうは、「ヒグマの名前が友達と一緒にだった」と言い、さかんに名前を呼んでいた。

⑩もチンパンジーとの関わりについて同様の内容を語る。第 5 章で B が言及した、チンパンジーと遊ぶ常連の子どもは⑩の娘であった。⑩は、「ゴウが手を差し出して挨拶をしてくれたことがあり、娘がそれに喜び、もっとしてほしくて色々なことをやっているうちに覚えてもらい、一緒に遊ぶような関係になった」と話す。「ワクワクドーム」

に行くと、そこからさらにガラス張りの室内に呼ばれ、そこで遊んでいたという。どのようにして遊ぶのか、という問いには、追いかけてこのようなことをしたり、動きを真似したりするという。B はこれについて、チンパンジー同士でする遊びの中の 1 つと同じであり、飼育員とチンパンジーもこうして遊ぶことがある、と述べていた。



写真 3. 来園者⑩の子どもと遊ぶゴウ
(来園者提供の動画より筆者が取り出した静止画)

⑩は移動したゴウに会いに行くために、近々ズーラシアに行くつもりだという。引越してからまだ半年なので、自分たちのことを覚えているのではないか、と話した。

6-2. 来園者から見た飼育員との関わり

⑧は、「カワウソに話しかけられていた飼育員がいた」ことが印象に残っているという。また⑩も飼育員が動物に関する知識を教えてくれることで、動物に詳しくなったと話す。始めは動物を見ても可愛いと思うだけだったが、高頻度で通っているうちに様々なことを教えてもらい、さらに動物園を楽しめるようになったという。「かみねの飼育員さんみんなお話し好きですね」と話す⑩は、飼育員から聞いたという動物の生態や

個々の生い立ちなどの話を、筆者にもたくさん教えてくれた。また⑩は、飼育員との関わりについて、以下のように述べた。

⑩「ずっと来ていても別に飼育員さんと何もなかったんですよね。前にやたらと、ペンギンのもぐもぐタイムに娘が、午前中と午後と行っていて。全然人がいないときもあって。で、1人だったりとかしているうちに、ペンギンの担当飼育員さんが『名前なんていうの』って聞いて、『〇〇です。』って言ったら知らないうちにみんなに広まっていた。もうみんな知っている、そこから。」

さらに、⑩は飼育員のことも名前と呼んでいた。特に親しい飼育員もいるという。ここから、互いを「来園者」と「飼育員」としてではなく、名前と顔を持つ一個人として認識していることがわかる。一方で、飼育員とはその日会っていないと述べる来園者も少なからずいた。動物園において、必ずしも飼育員と来園者は出会うわけではなく、特に関わりの濃淡が分かれるということが窺える。

6-3. 来園者同士の関わり

⑨と⑩がチンパンジー舎の前で話していた様子を目撃した筆者は、後日⑩にインタビューした際に来園者同士の関わりについて訊いた。⑩は、子どもがいることもあり、常連客とは何度も会っているうちに、気づいたら話す関係になっているという。⑨のことも名前と呼んでおり、先述したペンギンの担当飼育員との関わりもあって、⑨も娘の名前を知っていたと話す。他にも、子連れの子と仲良くなることがあり、動物園のイベントについてなどよく話すという。

6-4. 来園者の動物観・自然観・動物園観

動物観や動物園観を知るために、(i) 今日に来園の経緯は何か（何を求めて来園したのか）、(ii) 自分にとって動物園はどのような場所か（動物園の役割）、(iii) 動物園動物はどのような存在か、ということを中心に質問した。(ii)と(iii)は特に抽象的な質問だったためか、返答に窮する来園者も多かった。

(i)に関して、常連である①、⑨、⑩は「いつも通り散歩がてら」、「来られる時には来ている」などと返答した。動物園に来ることが日常になっているということがわかる。

一方、③や⑧はもともと約束していたといい、非日常のイベントとして来園したことが窺える。③の3人はその日の「もぐもぐタイム」にも多く参加しており、その際の飼育員の話や掲示物にも興味を示すなど、動物園が持つレクリエーションと教育の要素を十分に享受していた。④は「写真を撮ろうと思って。カメラを買ったので練習がてら来ました」と述べ、特定の動物の写真を撮ることに時間を費やしていた。インタビューの中で⑩は、来園者の属性の多様さについても語った。

筆者「友達同士でもけっこう来ている人いますよね、大人の方も。」

⑩ 「うん。女性同士とかけっこう多い。私も友達と来たことがあって。あとけっこう年配のご夫婦とか来ていて。仲いいなって（思う）。休みの日なんかはやっぱその、『〇〇オタク』（が多い）。『レッサーパンダオタク』とか。色々なレッサーパンダを見に行っているような人とか。あとはけものフレンズとコラボしたときは、アニメオタクっぽいお兄さん集団が来たり。けっこうその時々イベントによって客層が変わる。」

(ii)への返答で②、④、⑧、⑨、⑩に共通して聞かれたのが「癒し」を与えてくれる場所である、というものだった。さらに、①、⑥、⑦は子どもや孫が喜ぶという点を挙げた。実際に筆者が何度か訪問した際も、子ども連れの来園者がかなり多かった。関連して⑦は「子連れが多くて気兼ねない」という点も加えた。また、それだけでなく、自分たちも楽しめるとしたのが①、⑦だった。①の祖父母は、「起伏があって自分たちにとっては散歩にもちょうどいい」とし、動物園を訪れる理由が動物以外にもあるということがわかる。また、③の「説明を読むのが楽しい」という声のように、学術的関心が喚起されている例も見受けられた。

(iii)に関して⑨は、「家族だと思っている」と話した。他には、「人に馴れている」（⑤）、「貰えなければご飯を食べられない」（①）といったもの、「（人間との違いについて）損得を考えないところ」（②）といった意見が聞かれた。また、⑩は普段直接対峙する機会の少ない命について触れ、「亡くなったり新しく生まれたり、命について考えさせられる」と述べた。

6-5. 小括

多くの来園者が動物園を「癒し」が得られる場所であると回答するなど、レクリエーション要素は動物園を訪れる理由として一番に挙がるものだということがわかる。一方で、来園者⑩の語りによれば、はじめ「可愛い」という感情を向ける対象としてのみ見ている動物園動物の存在が、飼育員による話を聞くことで、その生態や生活史に対する興味へと転換がなされていた。楽しみを深化させていたともいえる。③も掲示物やもぐもぐタイムを通して学術的関心が喚起および促進されていた。ここからは、レクリエーションを求めて来園した来園者の関心内容が、飼育員や掲示物という媒介者によって転換・深化されたことが読み取れる。つまり、第5章で見たような、飼育員が来園者を「つなぎ、変容させる」役割が実践されていることがわかる。さらにここから、来園者が動物を理解する際にも「経験的理解と客観的理解の往来」が存在することが見てとれる。来園者と動物の個人間の出会いの経験に、生態や生活史という客観的事実を重ねることにより、立体的に動物を認識でき、楽しみが深化していることが窺える。

また、真意は分からないが、来園者⑧が「動物に話しかけられていた飼育員がいた」というように、来園者は動物だけでなく飼育員のことも「見て」いることが窺える。そして、来園者⑩は飼育員を見分け、認識し合い、対話するという。ここからも第5章にみられた「双方向性」、「ともに経験すること」が読み取れる。

しかし一方で、来園者は多様な目的で動物園を訪れ、多様な過ごし方をするということも明らかになった。そのため、全員が上記のように動物や飼育員と積極的に働きかけあうことを望んでいるわけではない。ここからは、飼育員と来園者間でも「働きかけない」関係性が存在することがわかる。第5章と同様、「働きかけない」、「つなぎ、変容させる」、「双方向性」、「経験の共有」を3者の社会関係を説明する手がかりとしてあげ、結論・考察へと繋げたい。

第7章 結論・考察

本章ではまず、3者それぞれの関わりあいについて先行研究の議論を踏まえて考察する。次に、「つなぐ」役割と他者や関係性を「変容させる」可能性について整理し、場としての動物園と3者以外の行為主体について触れる。ただし、下記に示した図式は単純化し、強調されている点を認める。来園者の多様性や動物種の多様性から、ここに示した限りではない。

7-1. 二者間の関係「双方向性」「経験の共有」「働きかけない」

(1) 動物—飼育員間

まず、動物と飼育員の関係について整理する。動物は、飼育員をおおむね害のない給餌者として認識していたが、前提として動物が飼育員の存在を受け入れることが、二者の関係の始まりであった。また、担当者とそれ以外の飼育員を見分け、優劣の判断対象としてみなすこともあった。ここからは動物の行為主体性が見てとれる。種によっては、遊びや挨拶という経験を共有していた。以上の事例は、動物園における人間と動物の「双方向」的な絡まり合いや、「経験の共有」という絡まり合いを示していると考察する。一方で、本来野生下で生活する動物種を担当する飼育員は、ときに「働きかけない」ことで距離感を保って接していた。この関係性のあり方は、カンデアが焦点を当てた detachment の考え方と相通じるものがある [Candea 2010: 241-255]。客観性を担保するため、また来園者に誤解を与えないために、意識的に距離を取ることが良好な関係性に寄与していた。

(2) 動物—来園者間

飼育動物は対来園者において、常連を認識し、大人と子どもで異なった反応を示すなど、判別していた。来園者も、常連の者は動物を見分け、個として認識していた。これらの事例からも、動物園において人間が動物を見るとき、同時に動物に人間も見られているという「双方向性」が見られる。また、来園者には多様なニーズがあり、動物と積

極的に関わらない者もいた。一方で、そのような来園者の存在も動物にとっての環境を形成し、空間を共有しているという点で、関係性の中にあるといえる。ここでも「働きかけない」関係性のあり方が見られる。

(3) 飼育員—来園者間

飼育員にとって来園者は、知識を提供する客体としての認識がベースにありながら、提供された来園者の反応が仕事のやりがいにつながるという文脈や、来園者から情報を提供されるという文脈では、来園者の行為主体性と「双方向性」も認められた。また、常連と見分け合い、認識し合う、会話するという文脈では、「経験の共有」が見られた。さらに、来園者の目的と過ごし方の多様性から、来園者と飼育員においても「働きかけない」関係性が築かれていることがあった。

7-2. 媒介する関係「つなぎ、変容させる」

(1) 飼育員、動物、来園者による媒介と翻訳

飼育員は来園者への情報発信と動物本来の行動を引き出すことにより、二者を「つなぎ」る役割を果たしていた。第 5 章や第 6 章では、飼育員との対話や掲示物によって来園者が実際に関心内容を変化・深化させた例を見た。それぞれへの影響が拮抗する場面もあったが、飼育員は先述した距離感やエンリッチメントなどの工夫により、この役割が果たす効果を最大化し、来園者と動物の関係性、また来園者の態度や見方を「変容させる」べく取り組んでいた。また、動物も来園者と飼育員の対話の促進や関係性の構築・変容に間接的に関わっているという点で、同様の文脈で説明することができる。来園者も、飼育員が見ていない際の動物の様子を伝えていた。また市民の動物福祉に対する目が厳しくなっており、飼育のしかたに影響を与えることもある。これらの事例から、三者はそれぞれにほかの二者を「つなぎ」、そのありようを「変容させている」といえる。

(2) 場としての動物園

3 者が出会い、作用しあう場としての動物園は、どのような役割を担っているのだろうか。来園者の語りでは、来園前に見たかった動物種と、来園後に印象に残っている動物種が異なることがあった。また、掲示物が来園者の興味関心を喚起した例、通ってい

るうちに来園者同士が顔見知りになった例、異種や同種の動物同士が獣舎の配置や移転、個体の移動によって関係性を生成する例も見られた。ここから、動物園が予測不能な邂逅の場としてそこに存在するものを「変容させる」可能性を有することが窺える。つまり、動物園という場自体がもつ行為主体性が読み取れる。さらに、動物園では、当初予想していたような 3 者以外にも多様な存在が関わり合っていることが分かった。獣医、樹木を管理する職員、共同研究をする学生や研究者などである。特に獣医はかなりの程度動物や飼育員と接しており、ハズバンダリートレーニングの際など、来園者と接する様子も見られた。

7-3. 動物理解のしかた

飼育員は、共通の言語を持たない動物を理解するために、経験的理解と客観的理解の両方からアプローチしていたという特徴があった。これについては西江のフレームワークを当てはめて考えた〔西江 2015: 88-90〕。西江は野生のチンパンジーを観察する際、「フィールドワーカー」として、自らの経験に基づいて対象を理解する態度と、「科学者」として、自らの存在やその影響、主観を排して対象を理解する態度という 2 つの理解のしかたがあるという。飼育員も、飼育動物の個性や動物同士の関係性、また科学的に説明できない物事について理解するときは経験的理解を、それ以外の動物理解の方法としては客観的理解を、それぞれ用いているのではないかと考えられる。このことは来園者による動物理解においても当てはまることであった。来園者は、動物園を訪れた際の自らの経験と、飼育員からの伝聞や掲示物による理解の両面から動物を理解していた。

7-4. 課題と今後の展望

最後に、残された課題および今後の展望について述べたい。まず、反省として野生動物かつ哺乳類に種選定が偏ってしまったことが挙げられる。このことから、本調査のみで動物園における社会関係のすべてを記述したことにはならない。一方で、漠然としたテーマから焦点を絞り切れず、研究対象領域および結果が散漫になってしまったことも認める。対象と問題の設定範囲を同等にしたうえでの検討がなされるべきだった。

また、生態学的な分析を十分にできなかった。行動生態学の素地を固めたうえで現地調査をおこなっていれば、観察からも多くのデータを得られ、自然人類学と文化人類学を架橋するような、より豊かな考察が導き出せたのではないかと反省している。さらに、

複数種が相互に作用しあっているという想定に支配されていたきらいがある。このため、現地調査においては、働きかけている事例の深堀に比重を置き、働きかけない共存のあり方にあまり目を向けることが少なかった。本研究で明らかになったことを足掛かりにし、上記の反省点を踏まえたうえで、他の人間—動物関係、また人間社会の文脈においても、異なる他者が共生するあり方を再検討することを今後の展望としたい。

注

1) 「人間と動物、一から多への視点」 <https://ekrits.jp/2021/03/4453/>
(2022/01/15 参照)

2) 接触領域（コンタクト・ゾーン）については、メアリー・ルイズ・プラット『帝国のまなざし』（Mary Louise Pratt, 1992, Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation. London; New York: Routledge.）を参照されたい。

3) Govindrajan, R.

2021 「インドの中部ヒマラヤの種を超えた関係性：ヤギの生贄からクマとの親密性まで」 <https://ekrits.jp/2021/01/4108/> (2022/01/15 参照)

4) 保全への取り組み：世界動物園水族館保全戦略 2015: pp.65

https://www.waza.org/wp-content/uploads/2019/03/WAZA-Conservation-Strategy-2015__Japanese.pdf (2022/01/15 参照)

5) チンパンジーは赤ん坊期（0～1 歳頃）、子ども期（2～8 歳）、若者期（9～15 歳）を経て大人へと成長する。オスは 13 歳、メスは 11 歳頃までに性成熟する〔佐藤衆介ほか編 2011：183〕。年齢を重ねると力も自我も強くなるため、だいたい子ども期までしかショーで使われることはない。しかし、単体で育っているために群れのルールを学ぶ機会がなく、チンパンジーの群れに入れないことも多い。B は、ショー上がりの個体の性格について、「可愛がられて育っているのです、そして一人で育ってきているので、『私が一番』っていうのがやっぱり強い」と語る。

6) オペラント条件付け：馴化や古典的条件づけとならぶ動物の基本的な学習タイプのひとつ。動物の自発的な反応に環境の変化が付随することで起こる学習。この際の反応をオペラント反応（operant response）という。後続刺激が提示されたことで、オペラント反応の生起確率が高まるとき、反応が強化されたといい、逆に反応の生起確率が低

くなった場合は、反応は罰されたという。強化する刺激を正の強化子（positive reinforcer）といい、罰する刺激を罰子(punisher)または嫌悪刺激(aversive stimulus)とよぶ [田中 2014: 32-33]。

7) 特定動物：動物愛護管理法に基づき、人に危害を加えるおそれのある危険な動物は特定動物として指定されており、これらの種を飼う場合は、都道府県知事等から飼養・保管の許可を受ける必要がある [富田 2014: 182]。

参考文献

デスコラ、P.

2020『自然と文化を越えて』小林徹訳、水声社。(Philippe Descola, 2005, *Par-delà nature et culture.*, Gallimard.)

ダイヤモンド、J.

2012『銃・病原菌・鉄（上）』倉骨彰訳、草思社文庫。(Jared Diamond, 1997, *Guns, germs, and steel.* New York; W.W. Norton & Company.)

ハラウェイ、D.

2008 *When Species Meet*, University of Minnesota Press.

2019『子どもではなく類縁関係をつくろうーサイボーグ、伴侶種、堆肥体、クトゥルー新世 | ダナ・ハラウェイが次なる千年紀に向けて語る』
<https://hagamag.com/uncategory/4293> 逆巻しとね訳、DOZiNE。(Donna Haraway, 2016, *Staying with the Manifesto : An Interview with Donna Haraway*, Cambridge; Cambridge University.) (2022/01/15 参照)

ホージー、G.; メルフィ、V.; パンクハースト、S.

2011『動物園学』村田浩一、楠田哲士監訳、文永堂出版。(Geoff Hosey, Vicky Melfi, Sheila Pankhurst, 2009, *Zoo animals : behavior, management, and welfare.* Oxford: Oxford University Press.)

インゴルド、T.

2020『人類学とは何か』奥野克己・宮崎幸子訳、亜紀書房。(Tim Ingold, 2018, *Anthropology: Why it matters* :Wiley.)

池田光穂

2012「野生動物とのつきあい方」奥野克己・山口未花子・近藤祉秋共編『人と動物の人類学』pp.205-238、春風社。

カークセイ、S.E. & ヘルムライヒ、S.

「複数種の民族誌の創発」近藤祉秋訳、『現代思想』45(4) pp.96-127.

近藤祉秋

2012「隠岐島のばける蛇」奥野克己・山口未花子・近藤祉秋共編『人と動物の人類学』pp.177-204、春風社。

コーン、E.

2016『森は考える：人間的なるものを越えた人類学』奥野克己・近藤宏監訳、近藤祉秋・二文字屋脩共訳、亜紀書房。(Eduardo Kohn, 2013, *How Forests Think: Toward an Anthropology Beyond the Human*. Berkeley: University of California Press.)

ラトゥール、B.

2019『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高訳、法政大学出版局。(Bruno Latour, 2007, *Reassembling the social : an introduction to actor-network-theory*. Oxford : Oxford University Press.)

溝井裕一

2014『動物園の文化史—ひとと動物の5000年—』勉誠出版。

村田浩一

2014「序論—動物園学とは」村田浩一・成島悦雄・原久美子編『動物園学入門』pp.1-4、朝倉書店。

中川志郎

1975年『動物園学ことはじめ』玉川大学出版部。

成島悦雄

2012「日本人と動物園」松木洋一編『人間動物関係論』pp.227-237、養賢堂。

西江仁徳

2015「出会うべきか、出会わざるべきか：動物研究者の抱えるジレンマと『二つのわかり方』」木村大治編『動物と出会う II：心と社会の生成』pp.88-90、ナカニシヤ出版。

奥野克己

2021a「序」日本文化人類学会編『文化人類学』86(1) pp.44、東京：日本文化人類学会。

大石高典

2021「媒介者としてのハチ：人—ハチ関係からポリネーションの人類学へ」日本文化人類学会編『文化人類学』86(1) pp.76-98、東京：日本文化人類学会。

佐藤衆介・近藤誠司・田中智夫・楠瀬 良・森裕司・伊谷原一編

2011『動物行動図説』朝倉書店。

柴田典弘

2014「ハズバンダリートレーニング」村田浩一・成島悦雄・原久美子編『動物園学入門』 pp.35-36、朝倉書店。

田中正之

2014「動物の学習に関する基礎知識」村田浩一・成島悦雄・原久美子編『動物園学入門』 pp.32-35、朝倉書店。

富田恭正

2014「動物園の関係法規」村田浩一・成島悦雄・原久美子編『動物園学入門』 pp.180-183、朝倉書店。

Tsing, A.

2012 *Unruly Edges: Mushrooms as Companion Species for Donna Haraway*, Environmental Humanities, pp.141-154, Duke University Press.

<https://read.dukeupress.edu/environmental-humanities/article-standard/1/1/141/8082/Unruly-Edges-Mushrooms-as-Companion-SpeciesFor>(2022/01/15 参照)

チン、A.

2019『マツタケ：不確定な時代を生きる術』赤嶺淳訳、みすず書房。(Anna Tsing, 2015, *The mushroom at the end of the world : on the possibility of life in capitalist ruins*. Princeton : Princeton University Press.)

土居利光

2014「動物園の福祉学」村田浩一・成島悦雄・原久美子編『動物園学入門』 pp.164-166,168、朝倉書店。

渡辺守雄ほか

2000『動物園というメディア』、青弓社。

山口未花子

2012「動物と話す人々」奥野克己・山口未花子・近藤祉秋共編『人と動物の人類学』 pp.3-28、春風社。

Summary

Anthropological consideration of social relations in the zoo

The purpose of this thesis is to depict the interactions between zookeepers, animals, and visitors in the zoo. With the advocacy of a geochronologic division of the Anthropocene, there is an increasing need to reconsider our perspective of nature. The idea that once distance from the conventional Cartesian dichotomy for nature, including animals, brings a new perspective has emerged. In anthropology, one of the efforts to overcome such anthropocentrism is called “multi-species anthropology (ethnography)”. This thesis is also in line with this new academic flow. And the zoo was set up as a place where entanglement between multiple species is taking place. Zoo Animals are kept under the control of humans, which are breeding, while maintaining their wildness. Zoo animals that are such ambivalent existences, the zookeepers, and the visitors who visit with various motives meet at the zoo. What can be seen by looking at the social relationships they weave in a generative theory?

I collected data from interviews and observations with 6 keeper and 10 groups of visitors. From there, it was found that there are various entanglements that go beyond just watching/being watched or feeding/being fed. The three recognized each other, shared their experiences, and sometimes actively distanced themselves. Also, when observed as 1 + 2 agents, it was found that they connect the other two and bring about transformation. In addition, the zoo itself was found to be an agent of action. Furthermore, it was found that the zookeepers and visitors understand animals from both empirical and objective understandings.

謝辞

本稿は数多くの方々のご指導、ご協力、またご支援のもとに書き上げることができた。

まず、本稿において最も重要である動物園でのフィールドワークとインタビュー調査を快諾して下さった日立市かみね動物園の職員の方々に御礼を申し上げたい。生江園長は、初訪問した際から温かく迎え入れて頂き、その後の調査や執筆にあたり、多大なお力添えをいただいた。そして、インタビュー調査にご回答いただいた6名の飼育員の方々のご協力なくして、この論文は成り立たなかった。普段の業務の合間を縫って、長時間にわたるインタビューや重ねての複雑な質問にも丁寧にご回答くださった飼育員の方々に、この場をお借りして心から謝意を申し上げる。

指導教員の関根久雄教授には、2年半という長い間お世話になり、感謝の念にたえない。本稿の執筆やゼミだけでなく、留学や進路についても的確かつ親身にご助言いただいた。たくさんご迷惑をおかけしてしまったが、寛大な心で受けとめ、ときに諫め、導いてくださった。先生の懐の深さと知見の深さには頭が上がらない思いである。続いて、鋭い洞察や斬新な発想で、たくさんの学びを与えてくれたゼミ生の皆様に、謝意と敬意を表したい。筆者の稚拙な考えも深い議論へと導いてくれ、多方面に視野を拡げさせてくれた。

最後に、論文執筆にあたり切磋琢磨しあった友人たちと、常に筆者の意思を尊重してくれた家族に感謝申し上げたい。皆様の存在は本稿の完成および筆者の学生生活を大きく支えてくれた。

改めて、本稿の執筆にお力添えいただいたすべての方々に感謝の意を表し、本稿の結びとしたい。